金字塔

高安月郊作

ヌ山ヌ山ヌ山ヌ山ヌ山ヌ山ヌ山

目錄

第一章　大文字
第二章　殺生石
第三章　黄色の光
第四章　闇
第五章　義理の奥人情の底
第六章　決斷天來
第七章　美人の手
第八章　機械
第九章　人さま〳〵
第十章　沙漠
第十一章　倶樂園
第十二章　同し男か
第十三章　同し女

第十四章　旋風
第十五章　花輪
第十六章　奴隷
第十七章　絶壁
第十八章　師走の月影
第十九章　むくい
第二十章　赤き光

金字塔

月下郊上散人作

第一章　大文字

晝は菊に暖き秋の日かげも、西に傾きてより見る間に薄うなりて、夕風桐を鳴らし、川端の柳漸く鴉を隱さす、鐘の音水を傳ふて來れは、立昇る烟いつしか別ち難くなりて、宵闇暗き本所の町はづれ、小家幾軒ありとしも見たぬ中に、何事そ一方夜を侮つてあかきは。

人は向ふ、車は寄る。煉瓦木造二階平屋大小建物八十余棟、窓を溢る燈、庭に燃ゆる篝、屋根をめぐる酸漿提灯、門に耀く富國紡績會社開業式の大文字、げに此あたりは晝よりも明なり。

客の夥しさ、泥をもてあそふ童先つ來れは、花傘造る娘、孫を貸す老婆、鼻緒縫ふ女房、屑をあつかふ商人、すたれ物つくらふ工業者、飴を錬る技藝家、人の意を書く文人、人の運を測る哲學者、火にていやす醫師、砂に畫く畫師、いくさ語る辨士、獅子を舞はす

勇士、辻を舞臺の藝人、家を目當の巡禮、晝の疲れを其儘に來れば、夜働くも足を枉げぬ。されと此等は招かれぬ客なり、されは門の内へは入れられず、門の前も拂はれて、柵に取りつき路を挾み、偶々許されて入る者あれは羨ましげに見送るなり。

招かれたる客は時を違へず、眞先に車乘りつけしは米洲より歸りて未た口無き經濟學者なり、續て黒羽二重五つ紋に絹の衿卷する銀行員、金時計新しき醫學士、葉卷煙草口を離さぬ辯護士、髭光る議員、眼鏡光る記者、胸に星掛る紳商、大砲掛る豪農、身より金耀く華族、先拂聲高く馬車轟かすも一人ならず、夜會結白衿、糸房長き花簪、矢飛白目ざましき娘さへ少からす。

朝河光世も招かれたる客なり、されと招かれぬ客と同しく久しく門へはは入らさりき。

第二章　殺生石

父は德川旗下の士なり、維新の際までは算盤取らす鍬持たす、三尺の秋水それも見ぬ春もありけり、書を好みて錢を惜まず、諸子百家倉に滿ちて年々の虫、千人手には

かけす、外には謠曲を好みて茶席酒莚人の醉を醒すまで厭はす、鉢の木最得意にして、佐野樣の仇名の方よく通りたりき。黒船の渡來長刀の錆を調らへてより、書を擲ちて先祖傳來の具足、長州鳥羽、伏見と、主家自家破滅の役に立てゝ果ては上野の一戰、臨月の若き妻と生別れ死別れ、きのふ憐みし敵の七絶けふ吟する聲も出てす、涙を呑て出て行きしが、手疵少々負ひしはかり、死別れとはならさりけり。されど片田舍の隱れ住み、明治の改元と共に一子を擧けしが、產後に惱む妻、乳に叫ふ兒に、腸屢々裂かるゝはかり、時徒らに過きて封建は郡縣となり、大名は華族となり、侍は町人となり、百姓は兵隊となり、書生は官員となり、漢學は洋學となり、道德は法律となり、文學は科學となり、両刀は鐵砲となり、上下は筒袖となり、結髮は散髮となり、有髮の最明寺も宿借りに來す、いつまで待てはとて無益と、今は名も新しき東京に出てぬ。されど死すとも敵に降らゞと政府には仕へす、黃金きたなしと商賈には交はらす、まだしも手を下すへきは田園なれど、賣りて買ふへき古書は反古の値となりて、讀む者なければ教ゆる事もならず、劍道は妾宅の番とよりならねは、詮方無しの賣喰、茶道具より始めて妻の嫁入衣裳に及ひ、果はまた書籍、せめて光世に殘さんと積置

きしも、此儘にせは常世と埋れん意有つてつけし名今更氣つかはしくなりて、紙屑同樣燒くよりつらく賣拂ひしが、妻は待つ子の出世彼とても官にはつけぬと二三度は云張りしも、十にならぬ内より英語習はせ、日本外史さへ讀ませて酒の味を忘れたりけり。西南亂れし年子の手を取て遺言なさんとしてなさすに逝きぬ。それよりは母一人子一人なり。母は引延す樣に思へは、子も遊ひたき盛りの頃を遊はす、苦學に早き年を苦學して、書も父の樣に買へねと父よりも多く讀み、今に母樣は馬車に乘せると嬉しき涙さへ催ほさしぬ。最好みしは歷史なり、小說讀ます新聞見す、民權論、自由說、國會開設の詔は兩國の揭示にて知りぬ。一日須賀町を通りて政談演說の廣告、李斯論ありといふに不圖入れは、辯士恰も机を叩て、「改良とは調和の望のある時の言葉である、今は改良の時でない、改革の時である、革命の時である。」警部は立ちぬ、聽衆は立ちぬ、中止解散、ノウ〳〵〳〵灰吹飛ひぬ、茶碗飛ひぬ、光世は驚て外に出てしが、耳に殘るは革命の一語なり。古本屋あさりて佛國革命史買ふて歸り、卽夜讀み始めしが終るまで眠らす、次の朝先つ買ふて見しは新聞の社說なりき。學校は欠さす行きしが其日の課程は幾何學、英文典、物理學、動物學なり。一時間のみ席

に出てゝ跡は裏の丘に登り、革命史また繰返しぬ。監獄破壞、斷頭臺、血は骨よりも暖く、マラア、ダントン、ロベスピエル、活動は動詞より命あり。次の演說會を待兼て行きぬ。けふは門に繩を張て、巡査二人入來る者を糺す。光世はいつに無き嘘をつきたり。「職人です。」「生徒だろふ。」「決して。」「拘引して調へるそ。」むつとしぬ、强て入りぬ、けふも解散なり、けふも騷動なり、光世は寧ろ愉快に覺ゆ、聽くよりは云ひたくなりぬ、喝采するよりはされたくなりぬ、中止されなは如何あるへき、人騷かは如何あるへき、ミラボウは誰ロベスピエル未た無し、有る者は有る者は——官吏となる考官吏を憎む心となりぬ、學校も止め、獨り自由之理繻きしが、半にして民約論に移り、時弊論二十枚はかり綴りし事もあり。されと未た政客の門を叩かす、演壇にも上らぬ中、全國不景氣の嘆、政談に錢出す者無く、前坐は講釋師となり、眞打は爆裂彈となり、ダントンよりチユルガウ、佛國派より英國派と、それより財政の書を開き、經濟の理を尋ねしが、需要供給の外に動くものあり、人情、譯もなく口にせし語始めて解し難くなりぬ。更に政事に顧み、廣く社會に鑑れは、今までの理想までゆるぎぬ。今までは只政事上の理想のみ、今は大に人生の理想、これなりこれなりこれを先つ定めすは、政事

はゐろか社會はゐろか、其身の生存さへ確ならすと、其頃最も行はれし經驗哲學の門に入りしが、榮螺の殼の自由ならす、理想派に飛へは空茫々、基督にたよりぬ、頭下らす、釋迦にすがりぬ、心休せす、老莊を起しぬ、蠅の立つのみ、遂に父の賣りし諸子百家に戻りしが、仁は仁なり、天は天なり、あはれ光世は學者ともならす、宗教家ともならす、政事家ともならす、何ともならさりけり。

此間の生活は重に母の力なり。幼き時習ひし煎茶活花女禮式、父の武藝同樣賣れぬ時は賣れす、裁縫簪毛糸編物彩色箱張上靴洗濯、光世の書物同樣變へる時變へて働く側に見られす、少しも早く職業をと十二三の頃より急けは、母は止めて、修業中は驚目もふらす、唯一心に勉強して十分にやつてからと、其身は髮一つ人に結はさす、價高き專門書も、出來るだけ買ふてやりぬ。政談にふける樣になりて母の手は鈍くなりぬ。光世も家に歸れは外の元氣に似す、默して職の手傳ひをすれは、母は前に似す、止めさりき。胸にこたへて奔走なし、或る雜誌の一欄を引受けしが、始め一月限にて報酬なし。經濟學に移りてより私かに思ひぬ、學成らは國を富さん家如き何かと勇みしは東の間、哲學宗教に移るに從ひ、沈み勝となれは母も沈みぬ、痩せて細くなれは母は猶細くなりぬ。

第三章　黃色の光

けふは叔父潮田剛平長となりて設けたる紡績會社開業式、珍らしくも招かれたりされと耀く門の內へ、靑さめたる羽織、裾切れたる袴、雪駄の樣になりたる日和下駄、常は氣にも留めさりしが、俄に心付て足進まず、久しく外に立ち居たり。

式は今始まるか、陸軍樂隊の賑はしき囃起りぬ。どよめく內、益なきにどよめく外、光世はこれを汐に入りぬ。社長は早上り口にあらさりき、これも幸と上りかゝれは、接待員の年若きがつか〳〵と來ていぶかしげに見つめぬ。不愉快となりしが今更引かれす、案內狀を示せは無言に取り行く、此方も無言に進み入りぬ。正面の廣間早式は始りたり。立群かる人の際より見まはせは叔父剛平、五十の上を五つ六つも過きたれど、けふは殊に若く、少しく禿けたる頭、黑き顏も耀て大なる目も光あり、太く下向きたる鼻得意氣に、下唇出てたる口を開て、挨拶の辭を述ふる眞中、よくは聞ねさりしが、社會の公益も計る考でとの結語のみ明なりき。

法學士黒瀬才馬フロックコートの衿を正して立ちぬ。普通學を修めし時同し窓に在りしが、いつしか中學大學と業を卒て遠くより世に現はれ、今は茲の取締なり。賄征伐の大將たりし面影は消て、鼻下の髭に卷上りたる唇も目立たず、肩を過きし髮も短く剃つて丁寧にかき分けたり。背低けれどよく肥て、剛平よりは聲透り、隅々まで行渡れり。先つ空論の益無きを識り、實利の貴重なるを說き、將來の多望なるを証して、言葉多く口早く、英雄の時代は過きました、戰爭の時代も長くはありませんこれからは商業の時代です、工業の時代です、機械の時代です——議院は開會しやうが解散されやうが、政黨は合併しやうが分離しやうが、內閣は薩長であらふが聯立であらふが、學問は英であらふが獨乙であらふが、宗教は佛であらふが耶蘇であらふが、回轉して止まないのは機械です——機械程自由なものは無い、何の力でも之を制する事は出來ない。機械程平等なものはない、賢愚美醜の差別をしない。機械程有爲なものはない、哲學者が石一つ持て考へて居る間に何億万の產物を作る。機械程確實なものはない、文人が空な事を作つて居る前へ有形の富を積上る——開化とは機械を利用する事である、進步とは機械を精巧にする事である——聖人も入

りません、天才も入りません、機械さへ精巧になつて、最多量に富を造る樣になつたら、人間の幸福は增すのです——しかし其機械も獨りは動かない、これを動かすのは資本家である、我々である——我々の富は國家の富となるか、國家の富は世界の富となるか、私利は公利と調和するか、これを証據立てるは學者でも無く、政事家でも無く、宗教家でも無く、卽ち我々である——我々は時世を代表するものである、又說明するものである。責任の重い處は名譽の多い處で、願くは此會社も名譽ある大事業の一にしたいものでございます。

皆拍手す。

西山伯爵の次男公好立ちぬ。胴の割に小さき頭なれど、目に金の眼鏡、口に金の齒、咽喉に金の留針、胸に金の鏈、両手に金の指環、凡人に非す。父は維新の功臣なり、一の株主なり、皆靜りぬ。公好は懷より金の短冊を取出しゝが、俗語は無くて、

「今よりは繫きとゝめん花紅葉」

大拍手、大喝采、剛平恭しく進てこれを受取れば、豪農は拜見と高めて見る。

經濟學者立ちぬ。先の演說に大同意でと米洲の實況、獨乙の學說、講壇の社會の保護

の自由のと、原語交りの長演説、一人坐を立ては追々出て行き、機械を見るあり、飾りを見るあり、食堂を尋ぬるもあれは、辯士打消す樂隊の囃、これを相圖に花火は上りぬ。門内門外歡呼の聲。また鳴出す笛太鼓、三味線の音に寄れは此方の一間、翌よりは工女の働く所、けふは舞ふ數十の舞妓、足音高く手振早く、風無けれと飜へる裳、羽無けれと飛びも上らん、客の目には天人の曲なるへし。光世は一目見たるはかり、人少き方を求め行けは、壁にかけたる大鏡に不圖寫る其姿、髪乱れてしかも帽子の痕いちゃるしく、額半隠れて、小さき目間遠きに過き、我なから鈍き心地するに、頬より下細りて顋さへ尖れり、これにかの羽織袴いよ〳〵見すぼらしく、振向かんとする途端、目を引く女の派手姿、しかも美津子なり、從妹なり。

「オヤ光世さん」

「暫く。」

「まことに暫く。よくいらしつた事ねへ。」

紫の裾薄く有明の涙に飛ふ千鳥に、下より赤らむ東の色、露に洗ひし若竹の帶に箱せこのつらゝ下り、衿より清き花の顔も、二重目ぶちいちゃるしきあたり少しく上

氣して、白き歯はの見ゆる口は紅稍濃く、豐かなる頬に一筋もこぼれぬ、髪は島田高く結ひ上けて白菊の簪村濃の糸房、ゆら〳〵と動く毎に鬢を打つ。

年は十ばかり違へど、此方はまことより上に見られ、彼方はいつも下に見ゆしが、けふは殊に下に見ゆて、物いふも改まる心地。美津子は何の隔てもなく、

「ちと内へもいらしつて——まだ今度の内へは一度もいらつしやいませんネへ。」

「エイ。」

「ア茲から見ゆますよ。」

窓に倚れは共に倚りぬ。美津子は彼方の一構、茲も燈あかき座敷より、木立半面築山池まで見ゆたるを指さして、

「あれですよ、あれが庭で、此方に亭があります、いつもそこで小説を讀むんです。あなたまう雜誌はお止めなすつたの。」

「遠に止めました。」

「なぜ。」

「つまりませんの。」

「私は大變好きになりましたよ、新版物は何でも讀みますな。なぜつまりません。」
「なぜつて……」
「ヂヤ何をしていらつしやるの。」
「何もしません。」
「何も――何かなさるんでせふ。」
無言。
「あなた位御勉強なすつたら澤山でせふ。」
無言。
「私はいつも新聞の廣告を見る度に、あなたのお名前がありはしないかと探すんですよ。――親父は」と云ひかけしが、言葉を改め、「伯母樣は」と云ひかけてまた改め、「久しく伺ひませんが伯母樣は如何でいらつしやいます。」
「此頃は大分弱くなりました。」
「弱く――さうでせふつて、長の御苦勞ですもの。」
光世は胸を刺さるゝ心地。

「まうお始めなさいましな。」
「エイ。」
「だが何をなさるの、政事の方は。」
「政治や役人は大嫌ひです。」
「ヂヤ學問、教師は。」
あれでも無し、これでも無しとは云ひ得れと、是で有るとはいはぬ身が、そも何を教へられやふと心に答へしが口には出ださず。
「何かお考へがあるんですか。」
「乞食になるんです。」
美津子は顏を眺めぬ、光世はわざと戯れしが、忽ち悔いて俯きぬ。美津は側に寄り、
「何かやつて下さい、私はいつか親父と云ひ合ひました、親父は――私は急度にらい人になりなさる、世間へ聞にる樣な事をなさるに違ひないと云張りました。」
光世は言葉無きまで嬉しかりき。されと顧れは其望今は我さへ我に置かれず。
美津は小聲になり、「内へも色々な方がいらつしやいますが、皆何ですよ、好い加減

なもので、お名前は大層ですが、どこがいらいのか私共には分りませんそれに皆下品で、お酒でも上ると厭ですよ、それは本に在る樣な人は見た事がありません。そして學者の政事家のと云つても矢張れ金に子へ――」

光世は先の演說を思ひ出しぬ、美津も思ひしか「あの黑瀨さんネへ、あの方は學者なんですか。」

「だうです[か。]」

「あの演說は本當ですか。」

「だうですか。」

「あの方はたしか貴君と同し學校にいらつしやつたんでせふ。」

「エイ昔――」

「それにだうしてあんなに。」

「それは才子だから。」

「あなたは余り御遠慮が過きますよ。それは皆あつかましいもので――あつかましいものが勝ちますねへ。」

「それが優勝劣敗でせふ。」

「あなたの樣に引込ていらつしやつては、誰も知りませんよ。」

げに誰も知らず、けふの如き群集、一人のものいふ者無し。また不愉快となりて横を向けは、美津子は羽織より袴までつく〳〵見て、

「何かなさいまし、待て居ます、是非。」

又樂隊の囃、立食始りしと覺しく、こゝまでも人は通るに、聲高に話しなから來る才馬公好、美津子を見て公好は立止りぬ。才馬何かさゝやきて進寄り、「これが西山樣で。」

「オヤさう、始めまして。」

美津子は丁寧に辭義なしぬ。公好少しく頭を下けしが、何か云はんとして云はさりき。片頰に大なる瘡の痕あり、光世は今心付きぬ。

才馬少しくそり身になり、「どうも大變な盛況で――あなた工場を御覽なすつたか。」

「ハイ一寸。」

「仕事を始めたら又御覽なさい、愉快ですよ。」公好の方をも顧み、「あなたも是非、そ

れは機械程愉快なものはありませんネヘ。學問も美術も宗教も何も入りません。
今に本でも畫でも彫刻でも一時間で作る機械が出來ませふ。」
公好少しく小聲になり、「十年かゝつても好いが、美人を製造する機械は出來ない
か知らん。」
才馬大笑して「なあに十月で製造する人間といふ機械があります。」
「でもこいつは美人が出來るか、れ多福か出來るか、分らないね。」
「分らないから美人が出來ると値が好いので。」
「でも余り少ない、それに直衰へてねヘ。さうだ色を保存する機械が出來たら好い。」
「ハヽヽヽこりや出來るかも知れない、聲を保存する機械が出來る事を思ふと、イ
ヤこりや藥ですね。一つ懸賞して醫學社會に考へさしたらだうです。」
「出來ませうか。」
「出來ませう。金さへ出しや一生かゝつても考へる學者はいくらもあります。」
美津はあなたへ行かんとしぬ、才馬引止め「イヤ先の御名吟をお聞きなすつたか。」
「ハイ。」

「此頃は大變御上達で、淡德も驚て居るんです。」
公好は意を得たるか金齒を現はし「あなたも甘い。」才馬珍らしげに顏を見ぬ「あな
たのは新しい、高尙な學理を含めるんだから。」
「ハヽ私なんぞはほんの途中の吟さ、隙がない。あなたなんぞは第一お隙だ。風流は
隙でなくつちや、オあの倶樂園はまだですか。」
「出來ました、近日あの何にも。」美津子の方を顧れは才馬心得、
「あの今度全國で最好い景色を寫して一つになすつたんで。」
「まあどちらへ。」
「向島の御別莊へ、淡德宗匠の意匠で、急度無類でせふ。」
「いつれ皆樣を招待します、何か變つた趣向をして。」
「それは妙、是非願ひたい、最風流な優美な艶麗な濃厚な、ハヽヽヽ。」
公好も微笑しぬ。
「いや腹も濃厚なものを需要する。だうです食堂へ。」
促かせは公好も行く、美津子も光世を誘ふて行けは、長き臺幾ならび、上には花にま

しへて鮎肴麥酒葡萄酒日本酒才馬手早く海苔卷を頬張れば、公好は麥酒を飲むのみ、美津子酌て光世にも渡せば、受くるはかり、何も飲まず、何も食せず、側には學者先醉へば、多々益々辯護士は能く辯す、銀行員底を忘れ、豪農捕へて議員は論す、醫學士よく食ひ、紳商大に飲て、吹きかくる臭き息に、光世は堪へず出てんとすれば、美津子は止め、いつくへ行きしか復來りて、

「だうかこれを伯母さんに。」

二重の折詰緑の紐かけ、提けらるゝ樣にしたり、勢附きて堂を出てぬ。段半下りかゝれば上り來る叔父剛平、光世は思はず默禮すれば、彼方は只見たるはかり、立止りもせず過き行きぬ。足を早めて庭に下り、門を出てんとする途端、頭の上を磨り行く火の音、彼方へ移り、此方へ移り、見る〳〵現はる壯丹の大輪、中には金の大文字、黃金の光に紅の花は忽ち廻り出して、人より家より野より空まで、星も月も日の光も合したるより耀かしぬ。

第四章　闇

光世の家は太平町、いつも暗き中に今宵一筋の光は母が待つ燈火なり。急かんとして心付きぬ、跡をつけて來る者あり。

屹と見ぬ、小童なり。何故そ、探偵か。罪はれろか何もせず。掏兒か。一圓も持たず。狐か。本所は不思議多き所。化物か。思はず笑ひぬ。

これなり、此折詰なり、これを狙ふは化物にあらず、狐に非す、掏兒に非す、探偵に非す、唯の童なるへし、おはれ貧しき童なるへし、をかしくもあはれに覺えて、與へんかとも思ひしが、美津子の志、母の喜、けふはやられす。

跌きぬ、折は落ちぬ、取るより早くさらへて行く。

追ふ、彼倒る、捕へて見れは隣の兒なり。

「何だ千ちやんか、つまらない惡戲をするじやないか。」

千吉はまた逃げす。

「ほしけりやほしいと云へは好いに。」

千吉は答へもせす。

「やつてもいゝがね、これはおつかさまに貰つたんだから、一旦持て歸つて、それか

らやるよ。」
「本當に――嘘だらふ。」
「何嘘をつくものか、僕が嘘をついた事は、無いとも云へないが、マア少ない。」
「皆呉れるかい。」
「慾張つてるネ、皆はやれない、分けてやるよ。」
「ヂヤ厭だ、皆で無くつちや。」
「そんな無法な事を云つちやいけない、先つお母様に上げて、それからお前所のお父様や姉様にも上げるんだよ。」
「なあに姉やちやんにやる事かあるもの、碌に飯も食はさないんだもの。」
「そんな事をいふものゝやない。姉様が無けりやお前等は乞食をする所だ。」
「あつたつてよ、あんな尼つちよは何にもなりやしない。」
「ひどい事をいふ、お父様にさう云ふよ。」
「云つたつて好いや、こわかあないよ。」
「仕様が無い兒だネヘ。」

「ヤ跡から聞てやがつた。」
げに姉は後にあり、箱細工を業とするしがといふ娘、光世は今更氣の毒なりき、しかは耻ちてか俯きて小聲なから千吉に、
「なぜお前そんな事をわしだ。」
「だつて……腹がへつたもの。」
「これ」と止めても止まらす。
「朝芋を食つたばかり、晝も晩も何も無いんだもの。」
「だうして。」光世はしがに向ひ「けふは休むだの。」
「いゝに。」
「それにだうして。」
千吉はまた差出て「落しちやつたの、わ錢は落しちやつたの。」
「落した。」
「あの子、あの紡績子へ、あれを見に行つたの。そしたら子、馬車か來て子、別當の野郎が突飛はしやがつたの。それで落しちやつたもんだからわ米も何も買へやしな

いの。」

「それはひどい目に逢つた。ヂヤ問屋へ行つて翌の分を借りたら好いドやないか。」

しがは益々小聲に、

「行つたんです、行つたんですが、毎度ですから貸してくれません。」

光世はあはれに堪へさりき。

「ヂヤこれを上げませふ。」

折を渡せば千吉は飛て行く。「これに待ち」と止めても聞かず、しがは「濟みません」も口の内なり。家は目の前なれば共に歩みぬ。道端に臥して歌唄ふは横町の醉漢なるへし米櫃かゝへて行く女房は質にか賣りにか。暗闇の夫婦喧嘩元は此二三日の雨なるへく、側杖恐れて門に立つ子供二人、一人の瘠はよも癒ねまじ。獨り留守する啞の子は此程より燐寸箱造ると聞きしが、今も音するはこなたの老婆も、晝さへ怪しき目いかにして覗けば、牛の臓腑嚙占めて舌打する翁、鼠取藥少しは賣れしか。馬肉屋の内より弱々と嘶く聲晝見たる跛へし瘦馬未た屠られであるなるへし。家は其隣なれは光世は別れぬ。千吉先つ戸を明けしが「大變だ〳〵。」

しがは走りぬ。光世も戻つてかけ入りぬ。

親市五郎は縊るゝ所。

しがは取付く、光世は抱止む、市五郎も機會を失ひ、爭はず坐りしが無言に俯むく

「なぜそんな馬鹿な事を」

「馬鹿な事ドやありません。活さて居る方が馬鹿けて居るから。」

「どゞぢうして」

市五郎は顔を上げしか又目をふさぎぬ。

「何か深い譯が有るんだらふが。マアそれを聞かして下さい。」

「深いか淺いか、つまりつまらないからさ。」

「つまらないからつて死んドや尙つまらないドやないか。」

「そりやお前さんなんぞは覺ねがないから。」

「なあに私等も御同然さ。」

「でもどこも惡くないでせふ。」

「それはマア体丈は滿足で。」

「それ見なせへ。それほど結構な事は無い。」
「お前さんだつて足はいけないが其外に――」
「其外につて、其足がいけない位つらい事は無い。仕事は知らず、字は讀めず、手と足が商賣道具さ。それを折つてしまつちや仕樣がありません。」
「そりやさうだか何か仕樣が――」
「馬鹿々々しい楊枝削つたり、下駄の齒入位で餓鬼二人かゝへてだうなるものですか子。」
「でも何か藝が――」
「藝て誰が仕込みます。」
「ヂヤね前さん始めからあれで通して居たのかい。」
云ふもうるさしと横を向くを、光世は強て譯を質しぬ。市五郎元日雇取なり父もそれ、祖父もそれ、封建の時も、郡縣の時も、專制の時も、議院の時も、鎖國の時も、開國の時も、太平の時も、戰爭の時も、異なるは頭の髮のみ。其身は七歳より始めて、四十七の此夏まで、一日も仕事無き日を悲しみ、時々の祭典、偶々の外賓、憲法の發布、豪商の葬式などに濁酒飽くまで飲みし事もあれど二日と續かず、得る賃錢の高い漸く高くなるとはいへ拂ふ物の値更に高くなれは同し暮しも漸く苦し。それにても妻持ては直に子は出來、次の年も其次の年も、年々子は殖て愈々苦しく、產蓐に草履の裏つけ乳呑子負ひなから磨砂賣りに歩るかし、先つ暫くは出來ぬと喜ひし子また出來て、五人目の千吉生む時、主人は恰も仕事無く、一枚の破布團、晩に出す積りて朝質に入れ、屋賃の方をすまして出て行きしが所得無く、やう〳〵車の後押して粟餅四つ持て歸れは、妻はうめく赤子は聲上く、木枯しの一夜貸布團も無くて明せは、熱出てゝ妻は病死子のみ殘りて上に五つを頭に四人の男女、死ぬにも多きに過きて死なれさりけり活るとも無く此間を過しけるが、年長て後上の子は惡疫に取られて、今はしがと千吉なり。官衙の建築、土石を運ふ中綱切れ石落ちて足折れね。それよりいしがの働度。富國紡績の建築、會社の工事近頃は先つ餓ゑす、汗を飲て暮しゝが、此なり。ボールの箱二三百、一日四五錢にては三人の口むつかしと已も手傳へど、荒き仕事に手堅まりて、小細工ならす益々上る物價、漸く近き冬、會社はけふ出來上つて、花火やら樂隊やら、茲までも聞ゐるのを、暗がりてぢつとして居ると死にたくなり

ました。活きて居たつて目當は無し、此奴にばかりかせがして、けふの樣な事があつちや、つまらなくつて見て居られやしませんやネ。

「そんな事を云つてれとッつあん……」しがは泣聲に云ひかけしが、涙に跡はいはさりき。

光世も云ふへき言葉無りき。

活るがよきか。死ぬがよきか、我身すら知らず、ましてかゝる場合、抑々何と慰むへき。見上れは黑き屋根裏より蛇の樣にすべりかけたる細繩、見まはせは破れし壁に何を防く死神の役者畫青き親子の顏いとゞ青きに、表はいつしか月となりけり。

第五章　義理の奥人情の底

光世は折を前に置き「マア〳〵今晩はこれでも食てれ寐なさい、私もよく考へて置くから――」

これより外に云ふ事ならず、其身もしは〳〵外に出て、我家に入れは母は尙余所の衣を縫ふて居り。

「大層遲かつたネへ」

「ヘイ……」

「賑やかだつたらふ」

「ヘイ……」

「茲までもよく聞はました。あの人の事だからさぞ立派に出來たろふ」

光世は心付きぬ、日頃養はるゝ代り、けふこそは進むへき彼折詰、隣まで持ち歸りて上けぬ心無さ、上けられぬ苦しさ、思へかか顏に油氣盡きて頰恐ろしく落ち、目の上に深き皺入り、鼻尖りて齒出てたり、昔の姿知らぬ程悲しくなりて、いつになく見れと訝らす

「れなかゝへりはしないか、そこにれ萩があるよ」

光世は涙ぐみぬ。

「あなたにと云つて美津子さんが折詰をくれましたがネ……」

「さうかい、優しい子だねへ」

「それをそこまで持て來て……隣へやりました……」

「隣へ。」

光世は今の樣を語りぬ。竹野は暫く手を止めて、

「それは好い事をれしだ、よくおやりだつた。あの人達は口が命だから何よりだ。私等はほしくも無し、何でも同し事だが、唯人の情、それは食べたも同し事だ、届いて居る、其上人の命まで助けられたのは重ね〳〵詰構な貰ひ物だ。今度逢つたらよく禮を云ひませふ。」

光世は嬉しくまた難有き母の言葉に、俯ひて理を思ふ。

「あの子は本當に好い子だねへ。」

「誰です。」

「あのね美津さんさ。」

「エイ。」

「聞かふと思つてまだ聞かないが、あの子の本當の親といふのは何だろふ。」

「私もまだ知りませんが、余り身元はよく無い樣です。」

「それにしても情があつて、悋惻で、好い子を貰つたものだ。」

「今の親には過きますね。」

「本當にさ、あの子がやかましく云ふから、近頃は附合はして居るが、あの人がマア——運といふものは知れないものだねへ。」

「實に知れません。つく〳〵思ひぬ。

「昔は學問は嫌ひ、武藝は嫌ひ、侍の僻に意氣な風をして、新内なんぞ語つたり、惡所狂ひに親類中借り倒して、しまひには刀の中味を賣つて竹べらをさして居たのを見付られて、勘當までされた人が今あの通り。」

「放蕩も學問ですよ、出世の始まりは祇園だといふから。」

「そんな事を云つてお前——」母は笑を含むて顔を見ぬ。

「はゝ私なんぞは此學科丈は出來ても出來ない。」

「だがさうだ子へ、勘當されてからといふものは、女をだまして方々渡つて居る中、京で何とかいふ藝者の厄介になつて居ると、その女に薩摩の參議樣が引つかゝつたので、一狂言書て廿く取入り、元手をこしらへて米相場。」

「それから絹をやる、茶をやる、酒をやる醤油をやる、保險をやる、鐵道をやる、今度は

紡績だが、何しろ金の勢力は大層なものだ、けふも色々な奴がやつて來て盛なものでした。

「そりやさうだとも、わ金の嫌ひなのは父様ばかりだ。」

「私も嫌いさ。少くとも此内へは黄金の光は入れません。」

「だうぞそうしたいものだ、父様はしまいまでさう仰つて、あの人も寄せ付けず、御臨終になつてから始めてわ許しなすつたが、まう其時はこつちは裏店、向は立派な邸に住て、馬車で來た子へ。」

「さうでしたかネへ。」

「癪にさはつたのは、勘當を許されても難有いとも云はなけりや、死別れも悲しくも何とも無いといふ体で、いつそ自分の出世を見せつけに來た様なものだ。」

「あの男ならさうでせうよ。苗字も變へて居るし、先祖代々の家といつて無し、御位牌や名目位だうでも好いといふのでせふ。」

「それドや義理も人情も無いんだ子へ。」

「だが今はろんな人間が多いんです。」

「だから私は昔の方が好いと云ふのだよ。外の事は兎も角も、義理と人情が第一ドやないか。いくら金が有つたつて、名が高かつたつて、義理と人情を欠て何がおらからふ。」

「しかし其義理と人情といふ奴が分らないものでネへ。」

「オヤわ前まで。」

「なに義理も人情も知らないと云ふのドやありませんがネ、義理とは果して何か、人情とは何かといふと分らなくなりますよ。」

「何が分らないのよく分つて居るドやないか。論語を讀まなくてつても、孟子を讀まなくつても義理や人情は誰だつて知つて居る筈だよ。西洋だつてこれは同し事だろふ。子供でも善い惡い位は分るし、親や兄弟は眞實思ふドやないか。」

「それは簡單な所で深く考へて見ると容易ドやありません。義理の奥人情の底を考へると、何ともまだ云へませんネへ。」

母はぢつと顔を見て、「わ前そんな事を考へて居るのかい。」

何となく恥かしき様なる心地しぬ。

「そんな事を考へて何もしないの。」
いよ〳〵耻かしくなりぬ。
「あんなに澤山本をお讀みだつたが、それ位の事が書て無いのかい。」
「あつても十分で無いのです。」
「それは詳しく云ふまでも無いからドやないか。」
「いゝね詳しく云はなけれやならないのです。今日は最早簡單な無意味な時代ドやありません。心から底から解得してからでないと、本當に活きて居るとは云はれないのです」
「本當にも嘘にも活きて居るドやないか。第一れなかゞへる、眠くなる寒くなる熱くなる。」
「それは、犬猫と同し事です。」
「だから義理と人情をわきまへたら立派な人間ドやないか。」
「其二つが分らないので。」
母は暫く俯きしが「れ前マアよく自身の事を考へて御覽。れ前は子供の時からかと

なしかつたよ。余りよその子とも遊ばず、遊ても喧嘩なぞした事は無し。いたづらもしないから、病身ドやないか、短命ドやないかと、それはどんなに必配したらふ。一寸風を引ても大騒をしたが、マア〳〵大病も無く、學校へ行く樣になつても、成る丈無理をしない樣にと思つたが、さう行かないばかりか却て年より早い學問をさせなくつちやならないあの時の苦しさといつたら……夜通しれ前が勉強する晩なぞは、私まで目が合はなかつた。いつも優等を取つて、それに品行が一番好いと、先生が褒めて下すつた時には、マアどんなに嬉しかつたらふ。まう其時は父樣はお出でなさらないから、れ佛壇へ証書を備へて、口の内でさう申上けたよ。それから段々勉強して、本も澤山お讀みだから、どんなむらいものにれなりかと、それば、つかりを樂しみにしてネへ——いつか何か書て居る事があつたらふ。れ前は見せなかつたが、私は見た。譯はよく分らなかつたが急度本にして世間へ出すのかと思つて居るとまた止めて筆も執らなけりや本も見ない樣になつたから、若しや勞咳にでもなつたんドやないかとびく〳〵したよ。それに……れ前は決して不義理な、不人情な事なんぞは出來るたちドやない、私はよく知て居る、そんな事は考へすにネへ——今

までした學問をネヘ――」

母は目を拭ひぬ。かくまでに云はれし事今まで無りき。光世は勿体なさに立てす居られす。母はまた縫物を手に取れは光世は止め、「まうお休みなさいまし、まう夜が深けましたから。」

「いゝゐ是非今晩の中に仕上けて置かないと、翌の都合が惡いから。」

「いゝゐまう入りませんまう明日からはお止め下さい。私が――私が致します何か致します。」

「何を」

「何か致します、急度致します。」

「何をするんだかそれを聞かなくつちや安心が出來ないネヘ。」

「それは其――これから考へます。」

「また考へるの。」

「十分考へますから御安心なすつて。」

「極まらなくつちや安心が出來ないトやないか。それに何をしたつて始めから甘

い事は無いから、私はマア手の動く間は仕事を止めません。」

「いゝゐに止め下さい、まう御苦勞はかけません。誠に――誠に――濟みませんでした。」

母はまた目を拭ひぬ。「なあに濟まぬ事があるものか。いくら金持でも華族でも其年まで學問をする人は少いだらふ。私はいつそ自慢だよ。父樣にも申譯が立つだうぞネヘ、わ金は這入らなくつても、名は廣がらなくつても、立派な御先祖へ對しても耻かしくない身分にネヘ。」

「エイ……」

「内や身なりはどんなのでも好いが、兎も角家らしい家に住て、わ前が世間へ出る其内にはわ嫁を貰ふ、孫が出來る、さうなりや私は安心して死ぬよ。」

「死ぬなんて、それからわ樂にするんです。」

「樂て別にしたくもない。父樣はしまいまで御苦勞なすつた跡へ殘つて私一人樂をしたら罰が當るかも知れない。」

「でもそれが子の義務ですもの。」

「それは前だつて義理を云ふドやないか。」
「アハヽヽヽいやもう考へません、目前の義務から始めます。」
「いゝは私の爲ドやない、は前自身の爲だよ。私はかうやつて居ても苦とも思やしない、兎も角ひもじい目もしなけりや寒い目もせず、は前と二人、誰に氣兼も無く殊に私の手では前に學問をさして居ると思ふと、何とも云へない程嬉しいよ。それも出來上つて、立派な身分にはなりだつたらどんな心持だらふ。」
「エイ……」
「決して急きはしない。私は氣を長くして居るから、私の爲でなく自身の爲に、十分身ごしらへして、ようく考へて。」
「いはまう考へないんです。」
「いゝ今度は私から考へてと云つたぇヽ。アハヽヽヽヽ」
「ハヽヽヽヽ」
近頃に無き樂しさなり。仕立物も恰も終りぬ。さらはとおたり取片付け、枕に就けば母は寐ぬ、いつもより殊に早し。されど光世は寐られざりき。宵に美津子に云はれぬ

今はまた母の言葉、最早猶豫すへき時にあらず、人生觀定まらずとも定まるまで待たれず、活る爲めなり、活る丈は誤らざるへし、誤と知らは何時にても止められん、知るまでは活きねはならず、活きるには働かねはならず、働くへし働くへしと、意氣昂つて起たんとすれど扨何をか爲すへき。
既に美津子に答へつ、官吏は嫌ひなり、政事家は嫌ひなり、教師は嫌ひなり、會社員は嫌ひなり、否好き嫌ひすへき場合に非す、されど官吏には縁故なし、政事家には主義無し、教師には學説無し、宗教家には信仰無し、美術家には天才無し、商人には資金無し、農夫には田地無し、無くては出來す、偽りには出來す、唯有るは元氣なり、おはれ定まれる理想だにあらは滿腔の血を濺て狂瀾怒濤とて踏み行くへきに、万卷の讀書何の役に立たす、三十の壯年六尺の男子、母に働かして空しく手を束ぬるつらさ悔やしさ耻つかしさ、隣の男にも劣れり。彼は十分に働て最早能はねはこそ娘に養はるれ、此は一度も働かす、働く力ありて母に養はる、馬鹿なり馬鹿なり、首くゝるに若かす
隣は靜に何の音も無くなりしは眠りしにや、花火も聞かす、されど目の前にき

ら〳〵と牡丹に金、火の子散り行く跡筋を引て、糸の様に、蛇の様に、ぶら下る隣の男きゝと笑ふ死神の顔見まゝと目をふさけは、待て居ます是非と美津子の聲、紫の裾摸様さて見違へる程美しかりけり、美人とはこれならん、言葉の優しさ、情知るとはあれならん、處女に似すさかしく、父に似す清きは養女なれは從妹とは名ばかり、されどまことのより親しきは何故にや、何かやれと彼さへ望む、やるへし彼に對してもやらねはならす。

一夜もだへしが定まらず、曉に至て少しくまどろみ、醒めて先つ思ひしは美津子なり。美津子に、否叔父に相談して見よふと毋に語れは。

「さうさネへ、お金を借りるんゝやないから良いだらふ。」

「さうですとも、頭を下けるんゝやない、唯相談です。」

第六章　決斷天來

空はよく晴れたり。一点の曇も迷も疑も無し。水田もこれを受て澄みたれと萬点の刈株、枯れて乱る蓮、著しく青き菜一畠に、をかしく造りたる松一村、此方にさびしき楠に葉尚茂るかと思へはパット立つ雀彼方の藪に收まり、代らんとてか白鳩三つ四つ勢よく彼木目さして上りしが、枝をめぐりて止らす、日影長く引て筑波に行く。」野を横に社を前に、高塀四方にめぐらして石門鐵の扉いかめしく中庭蘇鐵客をまはらし、玄關の正面には金地に鷲の大衝立人を脱む。光世は小聲に音なひぬ。答なし再ひしぬ。若き小柄の瞬早き男出てぬ、顔を見名刺を見て無言に立ちしが、漸く入り、稍久しくして出て來りて、今客來なれはこゝにてお待ちと云ふのみ、敷物も出さす。三十分はかり。始めて客間へ通さるれは、先客は余人ならす、黒瀬なり。

剛平は一禮したるはかり、來意はと促かし顔、光世は頓にえいはぬ中、才馬また話し出して切れ目無し。配當の、新株の、本場の、後場のと面白からぬ文句のみなれは、光世は四方を見まはすに、先つ目につくは占春の額の文字、大臣の筆なり。床には時の畫伯の筆、新らしき鶴の大幅、前に薩摩燒の大花瓶、俣野河津が角力の畫摸様、黄菊白菊紅菊紫菊溢るゝまでさして、青き關羽の彫刻も並ひつ。金蒔繪の棚には銀の倉の形したる置時計、獅子の香炉、歌麿の畫帖、舶來の太夫描きたる小箱、此方の壁には浴みする美人の油畫もかけたり。厚き緞子の坐布團、大なる桐の火桶の側には、何々會社

報告、何々協會年報、議員名鑑、紳士錄、名士傳、明治忠孝傳、相場表、慈善會、開業式、懇親會案内、大封の親展書五六あり。見盡して庭を見れば、蛸を逆にしたる樣なる松を眼目として、葉落ちても太き桐あり、露笑ふ竹あり、霜燒かんとする楓あり、手水かゝるあたり芭蕉もあり、黑き池に蓮もあり、築山に亭あるはきのふ聞きしが、美津子が置きけん、何の書にや、開きたるまゝにて風に紙立つ。

庭下駄の音近きぬ。垣のあなたへ現はるゝ美津子。けふは納戸瀧縞の着物に古代紫の羽織。顏見合して一寸會釋し、また元へ引返しぬ。

黑瀨の話は始めて濟みたり。「だうです此頃は」と向より云はれて、光世は僅に小口に取付き、「今度何かやらふと思ひまして。」

剛「何を。」

光「それで御相談に參りましたんですが。」

剛平は顏より膝まで見て、「今まで何をしてなすつた。」

光「何も別に。」

「民權雜誌はどうですネ。」微笑して黑瀨が口出し。光世は俯して答へさりき、

剛平は眼鏡を見て、「君は近眼だネ。本を澤山讀だネ。」

光「いゝえ。」

剛「君の父樣は本好だつた、それは大變なものだ、倉に一杯あつたが、あれはどうしました。さう〳〵賣つたつてネ。いくらになりました。」

光「いゝえ僅……」

剛「百萬圓にでもなつたかね。」まゝ、めに云へは黑瀨は大笑。

剛「本を讀まないものは馬鹿だと云つたが、私は餘り讀まなかつただから本の事は知らないが、其本で其學問でだうかしたら好いゝやないか。」

光「學問で無しに何か……」

剛「なぜ學問いけないかネ。學問程よいものは無い相だ。」

光「しかし……」

剛「親に似ないネ。」

才「今の子は中々利巧だから。」

剛「母樣は相變らず働てゐ出でかネ。」

光「ハイ毎日。」
剛「それは感心だ。兄貴は文武両道の達人だつたが、たう〳〵何もしなかつた。」
オ「そこが高い、所謂食はねと高揚枝、古人の風ありだな。」
剛「當世は食つて高揚枝でなくつちやいけない。だが侍の子は侍だ。本で育つたものは矢張本だ。本が好い、本でなさい。」
光「いゝね是非何か外のもので。」
剛「ジヤ何、番頭といふ柄で無し、百姓といふ体で無し。」
オ「一足飛に大臣かネ。」
剛「好いものがある、耶蘇の本賣。」
光「宗教もいけません。」
剛「ハヽヽヽ困るネヘ、會社の方も役員は皆出來たから、折角だが。」
オ「職工はまだですよ。」例の戯。
職工、光世は決斷天より落ちぬ。「職工になりませふ。」
二人は顔を眺めぬ。

光「どうぞ職工にお雇ひなすつて。」
オ「こりや好い、勞働は神聖だから。」
剛つて云ふとは知れと、已は眞にしか思へは、光世は更に求めたり。
香はしき咖啡三盞、うるはしき洋菓一皿、先に持たし、美津子は奥より出て來りぬ。才馬慌しく蒲團を下りて、長々と挨拶すれは此方は輕く受くるのみ、光世に向ひて昨晩はと、目に入る樣に會釋しぬ。光世は無言に頭を下けしが、顔は漸く熱きを覺えぬ。才馬また口を開て昨夜の花火、舞妓の踊、某令嬢の新裝飾、某夫人の厚化粧、戯言交へて話しつゞけしが、美津子は口に笑ふのみ、折を得て光世に向ひ、「あの伯母さんにも是非一度いらつしやいます樣に、會社へも御案内いたしますから。」
剛「なあに會社なら光世樣が毎日來るとよ。」
美「なぜでございます。」
剛「職工になるつて。」
美「エ、本當に。」
あきれし面持なり。光世は益々熱くなりぬ。

美「マアなぜそんな、職工なんて。」
オ「でも學問でなく、宗教で無しといふ御注文だから。」
美「なぜ學問でいけないんです。あなた位なすつてまだ御不足なら、洋行でもなすつたら。」
オ「まう洋行もいけませんよ、洋行のきいたのは明治十年度、今ではブラジルかホツテントチヤへでも行かなくつや。」
美「だつてあんまり、チヤ役員にでも。」
光世は顔を上げて「いゝえ職工が一番です。今まで餘り座り過ぎましたから、これから動きづめに動きたいので。」
剛平はまた笑はす、「マアやるならやるが好い。しかし職工は皆三年とか五年とか年を切つて雇ふんだから、三日で御免だといふ譯にはいかないが。」
光「十年でもかまいません。」
剛「そして身内だからと云つて、餘計に賃錢は出されないが。」
光「それは無論で。」

ごろ〳〵と石軋りて入來る馬車の音。西山さんでせふと才馬云へば、さうだと剛平も立上りぬ。迎へに行きて共に來る公好先つ美津子を見て忽ちそこに立止りぬ。剛平は布團をすゝめ、「ようこそ。」
公「ハア。」座らんとして畫の美人にまた見張りぬ。
才馬顔を見て、
オ「昨夜は御別莊ですかネ。」
公「あれから淡德をつれて向島へ月見と洒落ました。」
オ「月見、此寒いのに、これは風流だ。」
公「今頃の月は好いものだ、寒月が老婆の化粧なら少し若い——」
オ「三十年增の洗髮かな。」
剛「君におあつらへだ」と才馬に云へば、「決して」と眞ドめに云ふ。
剛「だうです、御名吟が出來ましたろふ。」
公「餘り面白くもないです。いつかセイヌ河で見たが、あの時やつて居たらもつと好い句が出來たかも知れない。」

オ「だうです最一度歐州を、今度は風流の行脚とお出かけなすつちや。」
剛「淡德は喜て隨行するだろふ。」
オ「私でも行きますよ、當時の行脚は滊車や滊船だから。」
剛「檜笠の代りにシルクハット頭陀袋が鰐皮のかばんか。」
オ「三階に遊女も寐たりなら、發句の千や二千、二万でもやりませふ。」
公「イヤ歐州は大抵見たが日本の方がまだ知らないから、芭蕉の行かない所へ行こふと思つて。」
剛「芭蕉が行つたつて唯見た丈だからつまらない、自分の物にしなくつちや。」
公「自分の物にしても、さう片端から行つて居られないから一めに集めて——」
剛「さう〳〵好いお庭が出來ましたつてネヘ、是非拜見を。」
公「近日お招き申します、其節には皆樣にも。」美津子を見れはまたかと俯むく。
三鞭酒出つ、冷肉出つ。だうです一戰と才馬促かせは、これ丈の人數ではと公好は浮かねど、剛平云ひつけて美津子桐の小箱を下せは、時ならぬ百花爛熳、光世獨り手持不沙汰なり。

また來る客三人、衆議院の議員、政黨の委員、當路の政事家飛鳥井正憲、「けふは本當に軍評定」
美津子は光世に目くばせして、先に立てはつゞいて行く。

第七章　美人の手

椽に出てゝ進むに從ひ、池は漸く狹くなりて山漸く近く、高きは櫻、低きは梅、汀に臨む躑躅杜鵑花、咲く頃さぞと思はるゝに、橋の上には藤の棚あり、池はまた廣くなりて山も向に下り、窮て離座敷、此方よりは路も無く、間細き流となりて、垣根に太秦形の石灯籠ある所美津子の部屋なり、楓一枝粟田燒の花瓶にさして、上に圓山風の東山の横軸、棚には鴨桂嵯峨などの寫眞をはめたり、此方の壁には琴三味線鼓まで置きたるが開きしまゝの舞扇、美津子も舞ふにや、嬉しき樣にもあり、氣味惡き樣にもあり、座りて猶座らぬ心地、美津は豆平糖の箱杉の蓋取て差出し、「これは京のお菓子ですよ。」
「難有う。」

「あなた京都御存ト。」
「ヘイ行きました、好い所ですネ。」
「お好き。さも嬉しげなる面持なり。
「あの畫に紅葉を見ると、丁度双林寺へでも行た樣です。」
「けふの樣な好い天氣に、圓山から智恩院を歩いたら——」
西の方を見てうつとりとなる顏、寫眞にて見し舞子よりも美くし。
「あなた舞をなさるの。」
美津子はサと赤らみしが俯いて、「いゝえ。」
「でも舞扇が。」
「これはおもちやに……」
「三味線に琴はなさるんでせふ。」
「エイ少しばかり。」
「一度聞かして戴きたいもので。」
「いけませんよ、お聞かせ申す程引けないんですから。」

「いゝえ一度母に」と云ひかけしが、翌より變る身の上に心付て差控へぬ。美津子は白魚の樣なる指をそらして居たりしが、不圖顏を上げ、
「あの伯母樣も御承知なんですか、職工になりなさるのは。」
「いゝえまだ。」
「それにマア、何とおつしやるでせふ。」
げに何と云ふへき。高等官か大學者か、大工業者ならばまだしも、職工とは日頃の望一時に消えて、其爲に張りし氣も挫けん、美津子さへ失意の樣子、先つ此方より云譯なさんと、光世は一寸顏を見て、「職工だつて決して卑しいものゞやありません。勞働は神聖です、いえ同し事です、頭を働かすのも手を働かすのも——頭を働かしたつて知れて居ます、學者の政事家のとえらい樣だが、考へて見ると其說が、其政略が、善いかどうだか、後世から見て誤つて居たら罪人です。手を働かすのに誤は無い、結果が直物になつて見えるのだから、十分に働かして正當の報酬を得て、それで生活が出來たら澤山です、それだけで十分です、其上に理想は入りません、これが大理想でせふ、最健全な、最高尙な——」

「でも職工になるものに高尚な者はありませんよ。」
「それは自分に知らないので、知らない方が尚ほらい。」
「いくら知らないつて――いつかもこんな事を云つて居るんです、虎の牝が豹だつて。」
光世は思はず吹出しぬ。美津子も口を蔽ふて、
「それに拵が惡くつて、亂暴で、女を見るとからかつて。」
これは覺ほのある事なり。されど光世は心付かず。
「それはあなた方とは丸で違ひます、そんな所が正直なので、上等社會の樣に狡猾ドやありません。」
美津子は色を變へぬ。光世も流石に心付て、
「しかし何です……其……」
急に出てぬつらさ說き得ぬばかりか怒らして終るかと思へば、居たゝまらぬまでの不愉快、さればとて此儘に歸らば、憎まれん、賤しまれん、何とかいふへき所、何とも云はれず、俯してかなたの膝を見るはかり。美津子は指だに動かさゝりき。

「あなた御存し」盜む樣に美津は伺ふ。
「エ」驚く顏にまた俯むき、暫くして顏は上げす、
「私はあなたを……賴りにして居るんですから……何かもつと外の事を……」
光世は赤くなりぬ。我を賴りにするとは夢か、母にさへ賴りにはならぬ我を、從妹とはいへ眞の親も知らず、確なる養父あるに何故そやそと見れは見る程美しき姿、此方こそ賴りにして、姉よりも、妹よりも、母ならぬ光、活きて働く甲斐ある心地するに何事そや。
「わ願ひですから……」
美津子も少しく赤くなりぬ。
「でも外に――これが一番正直ですから。」
「あなたは本當に――御正直ですネヘ。」
悲しげに見つめぬ。光世は寧ろ喜はしく、「まう筆なんぞは取りません。これからは腕です、腕が御入用ならどんな事でも――」
美津子は更に悲しげに光世の細き手を眺めぬ。

客間に高く笑ふ聲。光世は心付きぬ、華族大臣豪商と同し座敷に職工は入れざるべし。

「しかし何ですネへ、職工になつちやまう上る事が――」

「いゝから來て下さい。矢張始終來て下さい。」

光世はいよ〳〵嬉しかりき。美津は銀瓶の湯を酌て香煎振りかけ、六兵衛燒の湯呑差出せは光世は取らんとして不圖こぼしぬ。あわてゝ袂探れは西洋紙、かまはす拭ふ手先絹手拭出す美津子の手先觸れぬ、光世は胸に物躍る。

且那樣がお召しと婢の知らせ、促かされし樣に立上りぬ。此方より出てゝ二間三間、廊を過て玄關に出れは、また呼はれて美津子は行きぬ、光世は家に歸るまで茫然たりき。

「だうだつた。」

母は待兼し体なり。光世はまた勇み出し、決斷の程を語れは暫くは物いはす、顏のみ守りて遂に俯かきぬ。其色は恐ろしきまで青かりき。

何とも云はれぬ丈説明もならす、其内ゆる〳〵とゝ机を賣り、破服買ひに出てかけ

しが、隣の事を思ひ出して立寄りぬ

しがは顏を見るや否泣出しぬ。

見れは主人は寢て居たり、あはれ死て居たりけり。

「昨夜の御馳走を戴きますと、こんなうまい物はまう食へられない、これが食べ納めだ、まだおなかにある内に死てしまうが好いと云ひましたが戯談かと思つて居ましたら、本當に今朝――また首をくゝつて……」

光世は言葉も考もまとまらさりき。

されど目下に迫るは跡の事、葬送なり、娘と童と。懷を探れは先月賣りし無意識哲學の殘り一圓二三十錢あり。これにて先つ死したるものゝ仕末はつけど、扨活きたる子を如何。

これも職工。

試に話せは一も二も無し、万事宜しくと泣き付けは、光世は爲に周施して、同し樣に雇ふて貰ひ、寄宿舍へも入る事となしぬ。其身は毎日通勤なり。

第八章　機械

先つ困りしは機械の音なり、今までは普請の音さへ靜思の妨けと嫌ひしに、これは絶間無く一調に、終日囂と瀧の響されど瀧に籠りて座禪したる人もあれは、これを瀧と思へはよし、否機械にてよし、座禪に非す、活働なり、勞働なり休無き勞働を最能く現はすは此音よと、奮つて働けは扨此機械、今まで機械的の事物を好まず、体操を嫌ひ、數學を嫌ひ、文法を嫌ひ、物理を嫌ひ、化學を嫌ひ、法學を嫌ひしに、これはまことの機械なり。唯動くばかり、風情なく、心無く、しかも威あり、力あり、人を使ひ、命し、命し、假さず、許さず、聞かず、憐まず、動物か、怪物か、猛將か、魔王か、人は唯此爲に動くのみ、此下に働くのみ、棉花混交し、塵を去り、開き、打ち、集め、梳き、練り、紡き、繰返し、練合し、遂に實物を造出すは機械なり。あはれこは動くにあらで働かさるゝなり、自活にあらで奴隷にあらずや。

或日不圖思ひぬ、天地は此の如きものか、運命は此機械の如きものか――否々英雄は奴隷にあらず、聖人に自由あり、我は我心は――機械はまた考ふる暇を與へず。

千吉は如何、此は機械には平氣なり。血走りたる目、出てたる歯、父其儘小さきばかり子供らしき所無きに子供らしからぬ仕事、稍もすれば怠りて監督に叱られぬ事一日も無く、詮方無しに皆勤して賞與受くる事あれば、門前の矢大臣に過食して借財となる事あり、上野淺草と遊ひ歩きて二三日返らぬ事あり、男工の玩弄になりて怒れとも甲斐なく、遂に甘んし漸く見習ひ、いつか味淋に指を染めて、檸檬酒、林檎酒、櫻酒、紫蘇酒、葡萄酒、麥酒、と飲分け果ては正宗に若かずといふ。一日の賃錢固より一厘も殘らねは、稍もすればせがむは姉。

しかは好き元氣なり。始めは洗濯場の愁嘆話、人の身の上にも泣き、せめては福引の奬勵を當にして、半日の休暇唯寄宿舍に眠るを樂みしが、漸く食堂の評論に馴れて、裏塀の際に目もつき、男工のたはむれ顔を赤うして時に答へ、繪入新聞の心中話喜て聞く事あり。されど細く光澤無き顔いよ〳〵細く色惡くなりて、小さき目も益々窪む樣なり。光世逢ふ毎に嬉し氣なれど、屑だらけの髪、黒金巾の洋服、さても淺ましこれを美津子に比へては何等の相違そ。生れし時はかうも無らんしかを見れは悲しくなりぬ、美津を思へは嬉しくなりぬ、嬉しき夢を醒すは悲しき現なり、悲しき現

を忘るゝは嬉しき夢なり。

共に寄りし窓共に眺めし庭、けふも亭にや行くらん、けふは何を讀むらん、十分の晝休いつも行くはこゝなり、暮六つの引いつも見るは彼方、三味線の音、鼓の音、歌は聞ねず、舞は見ねど、彼聲か、彼姿か、彼手今も觸るゝ心地、情の言葉いつか忘れん、我爲には神か佛か、神佛程尊からず、人の娘程賤しからず、賴もしく、なつかしく、嬉しく、勇ましゝ。新なる理想、勞働の理想破れても厭はず、働くへし、新なる光、機械も照せ、路も照せ、家も照せ。

あはれいつも寄宿舍の窓より跡を見送る女あるに。

第九章　人さまゝ〳〵

光世が機械の下に働く間、才馬は人間の上に立たんと思ひぬ。

彼の目的は名譽なり、かつてヂスレリイの傳を讀て大に奮ひ、大名をなさずんば死せずと誓ひしより、先つ手始に難題造りて教師を苦しめ、それより學校に手下をこしらへ、運動會、懇親會、校長よりも人寄せぬ、機關雜誌の企一度敗れしが、流行の評論

に始めて其名乘りし時の喜、五十部買ふて鄕黨に送りしより、間がな隙がな諸種の新聞雜誌に投書して記者と交り、未だ業を卒へさりし中より其名多少世に知られぬ、辯舌は政談演說私かに聞て其呼吸を覺え、學術席上に鍛へ〳〵て、外國語は英獨自由に、佛も少々、露西亞さへかぢりぬ。文章は好まねと勉めて、一句の警語千字万字に延す能あり。鹿鳴館賑はひし時政事小說書て出せしが、招待ふろか紹介も得す、女學生の手を取て踊るに慷慨して、大に獨乙の法制を研究せしが、老人の腰巾着となりて何十年、纔に次官を僥倖するも面白からず、民間に向へは保安條例、これもつまらす、保守黨か、自治黨か、大同團結、立憲自由、集散離合漸く繁くなりて、第一議會開かれし時彼恰も業を卒へぬ、されど資本無し。此に至て先の舞踏の相手を思ひしがまた及ばす、頻りに力ある先輩の門を叩き、緣故無きは先つ大に攻擊して後交はる、交りまた已か範圍の外に出てゝ雜多の人に逢ふ中、潮田と相識りしは時節到來、忽ち資本こしらへて辯護士の看板柱より大なりき、それより多年ならぬ間に能辯家、達筆家、敏腕家の名を得しが中々滿たす、夢にも八方に目を配れは、英雄豪傑忠臣義士勤王家愛國者民權家有志家の時代全く過き去て、資本家の時代漸く來り、名は方に

社長局長市長議長總務總理に在りと見てしより、潮田の社に入りしも商工業者の間に地を造らんとてなり。今や衆議院に出てんとするに、反對の候補者は純粹の商人なり。學も無く辯も無く。しかも老たれと、土地の生れにて馴染多し。文章も顏に若かず才名も叩頭に及ばず、競爭愈々激しくして才馬の苦心容易ならず。人の上に立たんとして人に下り、頭下けさせんとして頭下く。殊に危きは金なり。敵は先祖代々二百年來積重ねたる資産を傾けて一月の間に盡すも厭はず、此方はさなきだに苦しき運動費十分一も當らず、また救を剛平に求むれは贊成して助力すべしといふ。猶安せずして正憲に謀れは、陰なから其勢力を貸さんといふ。

飛鳥井正憲が望む所は實權なり。嘗て三善清行、大江廣元、石田三成の徒勞を笑ひ、北條義時より、足利高氏、德川家康の成効を考へ、私かに政機の轉變を伺ふ。維新の頃は年未た足らざりしが、時の俊傑次第に逝きて、第二流の人も漸く老い、議院開かれて己は年壯、天下復た革命の大業無しとなして、目は早くより二大政黨に注けば、身は長藩より出てゝ未だ李斯の怨も買はず、薩の軍人にも交りて蕭何の不平も受けず、議場の接戰は韓信に當らしめて、時に范增と謀る事あり、しかも留侯に甘んずるや、

こゝの秘密を知るは潮田。

剛平は金なり。始め色に溺れて金に苦しみ、次て色に浮ひて金を捕へてより、八方に手を出して金をあざれは、市場は漸く左右せられて、商界の舊家も彼に下れば、學界の若武者も多く賴み、政界の老將も屢々依りぬ。株式、議案、會社、內閣、政黨、銀行、條例、工事、新論、新作といふ樣なる相互に關係無き文字連續して其腦を往來すれと、此上に主とするは金の一字、一錢も無きより起りて果てはいくばくに至らん。藤吉郎何者そ、恨むらくは彼を使はす。太政入道何者そ奢猶小さし、妻には芳原の妓を入れしが、また逐ふて後は通ふ所高執事より多けれと、家には美津子のみ粧ひ飾りて、客ある毎に示せば、公好さへ屢々訪來ぬ。

公好の父は薩摩の藩士、曾て鎖國攘夷より、勤王、討幕、破壞、急進、漸進、保守、集權、專制、政略の跡に從ふてしかも先輩の樣に變死せず、活殘りて名遂げ、錢出來、新華族となり、身退き、市中女に隱れて尙死なねど、兄も隱者形氣にて、鄕里の田園に犬を養ひ、山林に分入て銃獵を第一の樂とも只一の業ともなせば、万事公好の心のまゝなり。兄と違うて田舍を好まず、父にならふて市隱もせず、勉めて人に交際して、男女老若の

差別無し。好みもまた屢變りて、或時は能樂、或時は演劇、一中節となり、義太夫となり、琵琶となり、尺八となり、盆栽となり、兎となり、茶の湯となり、畫となり、俳諧となり、寫眞となり、溫泉となり、旅行となり、遂に座ながら名所を見る倶樂園そ出來上れる。

第十章　沙漠

けふは休なり。ゆつくり寢よと母は云へと、光世はいつもの樣に目醒めぬせめて朝飯のみ靜に終りて窓の前に座す。机は無し、書物は無し、手持無沙汰なり。障子を開けは枳殼黄はみ亂れて搔きむしらんとする向には、錦ならぬ蘆襖の幕張り、下に紙屑の築山、人は居す、鷄三つ四つ嘴にて撰る。

晝寐んと試みぬ。されと神經鋭くなり、いつもは疲れにて寐らるれど、けふは疲れ無き丈に猶寐られす、目をふさげは機械の音耳につく。

自然の美を見んと思ひぬ。されど町の中は塵深し町を出でゝも尙深し、武藏野は唯廣きのみ、墨田川は黑し、筑波は時に見ゆす、富士も瓦の上に現はれては何となく市氣を帶ふ。十里、二十里、三十里、出て行かんとせば錢なし。

美津子を見んと思ひぬ。されと彼家に行かは叔父を、社長を、雇主を見ねばならす。また冷遇、また嘲笑、いよ〳〵侮辱。

家を出てゝ當も無く行く。洗髪櫛もさゝす塵にまみれて行くはいづくの女ぞ。吾妻コート暖げに、二重外套目のみ出して、車を同うするは妻か夫か。水色のお高祖頭巾、眼鏡かけたるは女學生にや。茜色の帽子黑き洋服は貴夫人なるへし。いつそやの先生、洋服に足駄穿ては、高帽に衣着たるは僧か俗か、葬送の主上下つけ、前垂に書生羽織書生に非す、紐大工の頭のよりも長きそ書生にして、詩人帽は新聞記者なり、鳥打帽冠と並ひて行けは、編笠着て月琴引くあり、夏帽の卜者赤毛布の田舍人を呼へは、フロックコートの俳優揚卷の小娘に送らる。

茲は雷門の跡なり。物の音今は雷そも何の爲めに來り何の爲に去る。おもちやか、人形か、繪草紙か寫眞か、簪か、小間物か、飲物か、食物か、見世物か、音曲か講釋か、落語か、芝居か、バノラマか、釣堀か玉突か、大弓か、揚弓か、あはれ觀世音は其間に在り。此爲か、彼爲か、兎も角も堂に登る。まことに祈るものいくばくぞや。祈る所何事ぞや。安心を一錢に托して慰みを百錢に求むるあれば、乞食に半片を投して掬兒に全体を奪はる。

あり。奉納の大鐘に我姿をてらふもあれは、人の姿を追行くあり。赤き偶像を撫るあれは、大なる木魚をはゞくもあり。提灯の大小を比ふるあれば、繪馬の筆蹟を評するあり。喜三太の施主を語るもあれは、石の枕を口吟みて裏の方へ急くもあり。祈りても安せず、階前の易者に謀るもあれば踏まれんとするも恐れず、安心して豆あぎる鳩もあり。雀を籠にして離さん事を乞ふもあれば、年若き女うらなひに年若き男の手の筋を示すもあり。脱衣婆を拜むあり、閻魔を拜むあり、人殺を拜むあり、狐を拜むあり蛇を拜むあり、榎を拜むあり、灯籠を拜むあり、石を拜むあり。鐘はいつく、いかに鳴るらん、塔は人を上さず、更に高き樓閣は太鼓打て客を招く。

光世はまた客觀に飽きて、空を仰けはいと高し、雲を望めは遙なり。高山に登りたくなりぬ、せめてかれになりと登らんと錢拂ひ、砂上閣に登りぬ。

空は猶遠し雲は猶遙なり。眺め入れは益々遠く、益々遙にして遂に限無し。我を顧みれは有るか無きか、感極りて唯想ふ。想へばまた限無く、益々遠く益々遙、雲よりも空よりも、空や我か、我や想か

一發の午砲、驚けはあなたこなた吹鳴す製造所の滿笛我は是職工なり。光世は頓ひ

ぬ、稍寒き風烟を吹て滿ち渡る町の廣さ、家の多さ、人やいくばく、見下せば先のものは蟻か、塵か、塵も亦一色に非す、蟻もそれ〳〵の思を懷きて、二つとは同しからす。動き、觸れ、合ひ、離れ、和し、戰ひ、憎み、愛す。我を顧れは其さひしさ。唯知る者は無きにあらねと、常に交はるは職人仲間、されと唯事を同うするばかり、敵にあらねど友に非ず、同胞無く、父無く、母一人、我を知らず、思異なり。外には誰。一人も無きか、知るは無きか、思を同うするは無きか。

幻の如く、現はるゝは美津子なり。我を知るや、我を思ふや、思はすとも思ふは苦しきか、思ひ通ひて思はれなば樂しきか、それもまた想ならば唯想はん。

光世は想ひまた思へば、戀人は天女となり、極樂となり、神となるかとすれは、忽ち鬼となり、惡魔となり、地獄となり、それも拂ふて佛となれば、また消て空となり、色となり、火となり、水となり、轉し轉して思へは、後より、

「朝河さん。」

顧れは安立賴堂といふ男。三十の上を多くも越さねと、髯長く、髮短く、目小く、口大く、低き背に高帽がぶりて、新らしき外套、靴は古し。聖書繙きし時、頻に勸めたる基督教

徒後ユニテリアンに移り、またラシヨナリストに移りしと聞きしが。

「其後は。」

「だうなすつた。」

「あなたは――矢張ラシヨナリストの方に。」

「イヤ今度禪學の倶樂部を立てやうと思つてな。」

「禪――禪になつたんですか。」

「さう、いや禪をやると舊教も新教も皆馬鹿氣て居るネヘ。」

「デヤ神はだうなりました。」

「神といふ考は始めから漠として居つた。どうも東洋人の頭には判然しないよ。寧ろ下等社會だ。下等の人間の頭には色々な神があるから、基督の神も這入るかも知れないが、我々には駄目だ。我々に神といふと天と同し樣に思はれるが、さうすると父の樣で無し、造物とすると科學が許さず、宇宙の精神とすると無情の力になつてしまふし、道德の大本とすると優勝劣敗と撞着する。高天原ですら地に落る位だから、天國も空氣に消ゐてしまつて、無報酬の樂天主義は厭世よりつらいじやないか。御利益が宗教の秘訣だ。基督も親鸞程磊落でなく、孔子程淡泊でないから困るよ。奇蹟や方便は今日では小學校の生徒でも感心しないし、愛の福音は最女學生に入り易いが、一家の主婦になると段々變つてしまふのはどういふものだらふ。敵を愛せよと云つても、戰爭の時は世間並に敵愾心を起さなくつちやならず、自分を犧牲にせよといつたつて第一何か食はなくつちや生活が出來ない。精神的生活は肉体的の死とすると、肉体的の死は精神的の死となりやしないかそれとも人間に限るとして動植物は犧牲にしてもよいとすりや、まだ私愛だ。さう博愛に制限やら例外のある樣ドや決して大法とは云はれないネヘ。」

「チヤ佛の方では尙更生活が出來ませんネ。」

「それはまだ徹底しないからさ。禪に入て見給へ、一喝すりや神も佛もない。」

「けふはお一人で。」

「これから西山伯爵の別莊へ行くんだが、時間が早いから一寸こゝへ。」

「あの人も禪宗なんですか。」

「いや伯爵はまだゝが子息が頗る奇物で、俳諧をやつて居たんだが、俳諧も禪だと悟つたんだネヘ。芭蕉の芭蕉たる所は禪味に在るといふので、自分も大分やる氣になつた樣だから、けふ一つ倶樂部の事を――」

「禪の倶樂部といふとだういふので。」

「いくら禪でも座つてばかり居るのは迂闊だから、寺でもなし、會堂でも無しといふ一の倶樂部を立てゝネヘ會員の隨意に問答なと、運座なと、茶の湯なと、何でもやらせる。だうも今までの禪徒は寂莫に過きて活氣に乏しいから、一つ改良して、一休も、利久も、芭蕉も、明兆も、一つに寄せよふと云ふのさ。君もだうです。」

「僕の樣な貧乏人はとてもお仲間入は出來ません。」

「今何をしてお出でだね」

「職工です。」

「職工。」

「改めて姿を見ぬ。」

「僕の樣な悟らないものは水ばかり飲でるのさ。」

答無し。暫くして賴堂、

「僕はまだ晝飯を食はないからお先へ。」

「さうですか失敬。」

賴堂は下り行きぬ。風愈吹き、塵愈立つ。光世は翼ほしくなりぬ。美て鴉を見れば、何を求めてか銀杏に降るに、下より鳴く鶴の聲はいつくの樞にや。鳥ほど樂天家はなしと何にやらに讀みしが、今の聲は樂しきか、悲しきか。心細くなりて、閣を下りぬ。裏へぬけて川を渡り、堤は好まねば横きりて畦道を行く。野は漸く家となり、村は漸く町となり、豆腐屋あり、酒屋あり、料理屋あり、藝者屋あり、隱宅か、別莊か、茅屋も賤しからず、竹の垣も貧しからず、新に建つ高樓、立ちしばかりの大厦、主は誰と見れば西山別邸、さては此程噂に聞きし倶樂園はこれなるべし。人多く出入するは園遊會か。美津子より貰ひし切符、袂さくれば恰も在り。不圖見る氣になりて内に入る。

正面遠く玄關あり、右手直に庭口なり。光世は此方の小門を開けは、先つ數百株の梅の林、札立てゝ小向井とあり、十七字も書添へたるが讀まずして入る。林盡きて丘あり。小さき庵を立てゝ鳴立庵の額西行の像にてもあるかと見れは、虎の石誰にも動き相なり。山を下れは磧となる。向に暗き窟辨天とあるは江の島かくゞり出れは竹の下道、漸く高くなりて極まる所舞臺あり。清水か、初瀬よりも眺は遠く眞の富士、下には大なる池を見る。琵琶の形して島あるは竹生島か。三つ四つ五つ寄るは松島二つ繋くは二見の岩か、三保の松原彼方に出て、渡月橋此方にかゝる。汀の砂殊に白きは須磨よりや取りけん、櫻最古きは芳野よりとあり。長き廊楓の上を渡りて、向の山に移れば岩樣々、石山かと思へは柱の如き石は鋒か嶽ゆるぎ石少しく危きに、崖にかけたる棧橋蔦までからましたるは渡られず。瀧の音に近づけば細けれど裏も見られて、水は漸く細き瀬となり、末は幾筋分れて桃の間に入る。

銀砂灘あり、仙草壇あり、陸舟松あり、安民澤あり、扇の芝あり、鎧掛の松あり、古池の句碑あり、梅の腰掛あり、貴人榻あり、傘亭あり、硝子の茶屋あり、釣殿二層、屋根に羽開く鳳凰あり、主客皆此間に寄る。

「だうも此意匠は相阿彌を走らすネ」と黒瀬に云はれて微笑するは淡德なるへし。茶色の衣に鼠色の十德、齡は思ひしより若く、髮も五分苅、骨逞ましく辯滑かに、

「淡德の畫寐起すや薩摩琵琶——一曲伺ひたいもので。」

西山に向へは髭を撫てゝ「イヤまう醉ふた、醉ふと聲が出んよ」

「琵琶よりか三味線だ、新内やれ。」軍服着たる髯男はいふ。

「義太夫の書伯はまだか。」と公好願れは、

「新右衛門蛇足をさそふ冬至かな——だうです誘つてまゐりませふか。」乘出るは賴堂なり。

「ハヽ君も俳をやるネ。」

「禪も俳も同し事ですから。」

「椀も茶椀も同し事かネ。」

正憲笑へは才馬はすかさず、

「ヂヤ浪々」と盃洗さし出す、

「足元の確なうち山を」と記者促かせと誰も應せず、和學者獨り須磨へ行けは、漢學

者らしき男桃源尋ぬ、公好呼止め、

「まだ名が無いから皆相談して極めて貰ひたいもので。」

蓮「名所をお取りになつたんだから、其儘で好いドやございませんか。」

公「イヤ名所の好い所丈を取て集めたんですから別に何とか好い名をつけたいものです。」

和「ヂヤ名も一字つゝ取て山を――こりやむつかしい、二つや三つで無いから。」

「名なんぞはだうでも好いドやないか」と笑ふは剛平なり。

オ「イヤ名が大事です、後世に殘りますからネ。」

公「後世に殘りませふか。」

オ「殘りますとも、これだけの名園は外にありませんから。」

頼「後樂園を凌きますネへ。」

オ「イヤ後樂園は獨り樂む園で、此、倶樂園は衆と倶に樂むのだから理想が廣い。」

正「とてもの事に富士を取つてほしかつた。」

談「それは取れません餘り大きうございますから。」

剛「大きいから尚取りたい、私なら琵琶湖と富士にするネ。」

頼「こりや好い。どちらも一夜に出來たといふから、一つ所へ寄せて一目に見たら寛濶の極でせふ。」

公「しかしそんな事は出來るか知らん。」

剛「出來ますよ、金で出來ないものは無い。」

談「しかしさうするにはこゝでは狹うございますネ。」

剛「さうだ東京近所ドや空地が無い。いつそ富士の裾野か、琵琶湖の邊へこしらへるかな。」

オ「それドや本物になりますネ。」

剛「本物さ、矢張本物が好い眞似ドや直飽くよ。」

公「でも本物ではさう方々。」

剛「なあにどし〳〵買込みますさ。景の好い所は皆買込で、應擧や西行を困らしてやるのも面白い。」

頼「こりや愉快だ、本當に掌内握乾坤だ。」

公好少しく樂まず、才馬早く色を見て「山水も好いが尙好いのは人間ですネ。」
正人間も好いが尙好いのは美人だろふ。」
オイヤ美人よりも英雄です。どうです、古今世界の英雄の肖像を書かしてお集めな
すつちや。」
公「さりやまた大變だ、誰でせふ。」
剛「先つ第一に黑瀨才馬。」
オそれはちと早い。棺を掩ふた所では西鄕南洲。」
正「西鄕を英雄と思つて居る中は君も議員にやなれないよ。」
オイヤ明治の英雄といふのドやありません、維新の英雄で、英雄も畢竟時勢の產物
ですから。」
剛「亞非利加の產物とどつちが高いだらふ。」
オイヤ和塲はいくら動搖しても、上つて行くのは名譽です。」
公「するとお互に下つて行くんですか。」
オイヤ一般は段々進て行つて、殊に機械で何でも出來る樣になるから、英雄が出て

も仕樣が無いのです。だから昔の英雄は德ですネヘ——淡德宗匠も遲かつた。も
つと早く生れたら鴨川の水ばかり飲て居られたのに。」
淡「イエ今でも結構です。江戸に坐つて居て巴里のお酒が飲めますから。」
頓「今に他の星と交通が出來たら、空中の行脚が出來ますネ。」
オ「それは行脚ドやない行座(あんざ)か、イヤ君も空中で座禪をする事が出來る。」
頓「こりや妙、禪學の一進步だ。」
公「二十世紀は樂みですネ。」
オ「そうですよ、機械は益々改良する、科學は益々發明する、天の上へも行ければ、地の
底も探られる、富は益々殖る、名の範圍は益々廣くなる。」
剛「金星と取引を始めるかネ。」
オ「地球で失敗すりや火星の總理大臣になれは好い。」
正「イヤ星の議會へ出るにや、もつと競爭が激しいぜ。だうか地球ぐるみ衝突しない
樣に。」
オ「はゝイヤそれは大丈夫、まだ三十世紀や四十世紀で出來さうもないから。それよ

りか今歳の議會で一働きしたいものです。」

公「だうです、撰擧の景況は。」

才「難有う。イヤ勝算十分です。何しろ相手はエビシさへ知らないんですもの。」

正「しかしエツキスは誰が知つて居るだらふ。」

剛「兎角算盤がむつかしい。」

公「本當にむつかしい、私は學校でゞも一番困つた。」

頼「しかし數學は昔の易、今の兵法ですネ。」

才「源平の爭も、南北朝も、大阪陣も、維新の革命も、西南戰爭も、官權民權も、政黨の競爭も、政府と議會も。」

剛「皆數だ、こりや好い。」

公「成程物は數でこなすかな。」

淡「さうですとも、芭蕉や蕪村のねらいのも句の數です。澤山作て居る中には好いものも出來りや、世間へ廣かりますから。」

才「そこが成効の秘訣だネへ。」

剛「當世は數で無くつちやまづい物でもどつさり食はしや、腹が一番に得心する。」

正「しかし醜婦ばかり多くつても酒は飲めない。」

公「それは山水へ割付けました。」

「それでは」と皆總立。

鴨川に鴛鴦あり、桃山に蝶々見ゆ、お杉お玉紫檀棹の三味線引出せば、小楊枝頭に戴せて來る小原女、芝居風のお里釣瓶鮨を勸むれば、あをによし奈良まで行かすとも賃には春日の火打燒三作も女の子なり、三輪の茶屋梅川鍋飯出して、大德寺の天目茶碗、給仕には地獄太夫、小夜の中山の飴の餅守るは幽靈に非す、養老の瀧壺山姥客に孝にして、姥の餅の姥も負けす忠なり。赤前垂の湯女鷄卵を供してれ湯も如何と伺へば、松風村雨鯛の濱燒桶に運ふ。

光世は若しや美津子を見んかと。夜泣石に腰かけ居たりしが知れねは立て童子に道を尋ね、歸らんと竹をくゝり、流のほとりに出つ見れは水につけたる床机に腰かけ物かたる黒瀬と美津子。

オこゝは鴨川ですネ。」

美水は一寸似て居ますが、山が木曾の書にある樣ドやありませんか。」
才「それは折衷したのでせふ。しかし舞子は祇園其儘だ。」
美なあに顏だちが違ひますよ、衣裝はかり眞似をしたつて。京らしいのは一人もあ
りません。」
才「其代りお客にあります。」
美津子は面白からぬ笑を洩して横を向きぬ。
才「一体婦人のお客に藝者を出すのは不都合ですネへ。」
美「だつて男のお方が多いんですもの。」
才「いゝえ、いくら多くつても婦人と同席なら入りません。」
美「ヂヤ私共が藝者の代りをするんですか。」
才「決して、男の方がするんです。歐州ドや男がお酌をしたり、お肴を取つたり、いろ〳〵
御機嫌を取ります。それが本當です、それが文明です。だうも日本はまだ未開だし
かし情のある者はしますネ。」
美「ヂヤさういふ方に御交際が願ひたひものですネへ。」

才「まだお逢ひなさいませんか。」
美「エイまださつぱり。」
才「馬少しく失望の体なり。私の朋友は大体それです、その位の事はやつて居ます。」
美「ヂヤちと御紹介を。」
才「馬益々失望の体なり。「ア向へお里が行く、昔は皆女の方から慕ひますネへ。」
美「西洋では。」
才「多く男です。女といふ者は一体受身なものだから、男の方から色々と親切を盡し
ます。日本ドや逆だ、しかしあれは芝居ですよ、實際は矢張彌助の方です。」
美「ヂヤお里も樂ですネへ。ですが當時は維盛樣の樣な男も見受けませんネへ。」
才「あんな柔弱な男はありません、今の平家は公好樣の樣に活潑だ。」
美「あれお鮨を」と笑へばげに公好は立て手攫み。
才「いや色男も進化しました。當時の色男は——これは貴女に伺ひたい。」
美「私共には——あの地獄太夫にお聞きなさいまし。」
才「馬は絶句しぬ。靴の先にて「水をなぶつて居たりしが、有意か無意か美津子が裾の

菊に飛しぬ。これは失禮と拭ひに寄るを、此方は早く身を起して、濁の裏見に行けは、向より來る公好。

「今日はよくお出でゝだうも十分に行屆きません。」

美「いゝゑ結構でございます。よくまあこんなに色々と。」

公「まだあちらに畫や寫眞が澤山あります。祐信から長春章、歌麿、北齋浮世畫は盡く寄せました。」

美「それはさぞ御奇麗でせうネへ。」

公「だが畫の美人は顏が皆同し樣です。」

美「寫眞がお上手ですつてネへ。」

公「上手といふ事はありませんが面白いです、どこへでも持て行きます、隨分寫しました。山水ばかりでなく色々なものを。矢張さうだ人間が好い、女が——」

美「それはちと拜見を。」

公「あなたも寫さして下さいませんか。」

美「いけませんよ私なぞは。」

公「いゝゑ是非——今日——」

美「いけません、私は寫眞は嫌です、いつも厭に寫るんですもの。」

公「そんな事はありません、補筆しなくつてもあなたなぞは——さうだ色をつけさしませふ、そしたら猶好い、其儘だ。」

美「いけません、寫眞に色をつけたのは厭なものですよ。」

公「ぢや畫にかゝせませふ、油畫にだうかそうさせて下さい。畫かきをお宅へやりますから、二三日モデルになつて下さい、そしたら二枚書かせまして、一枚は差上げます、一枚は私が——」

美「猶いけません。」

公「是非だうか——私も書かせました。全身でネ、古風な羅馬の貴族の裝束で立て居る處を。あなたなら希臘の風俗が好いんだけれと、お厭ならエリサベス時代か、巴里の當世風、日本風でもよろしい、振袖でも被衣でも、浴衣でも、寐卷でも——」

美「いやな事、それよりあなたのを拜見、さぞ御立派でせふ。」

公「いゝゑ顏が余り似ませんよ。」

美「それは西洋風になさるからです。あなたは烏帽子か冠がうつりませふよ。」
公「烏帽子か冠、うつりませふか。」
美「どつかのお方をお姫様にして、御一所に。」
公「そんな人はありません。」
美「お雛様が嘘をつくものドやでございませんよ。」
公「いゝほんとに、嘘ドやありません、決して。」
美「だつて先も寫眞は女が一番好いとおつしやつたドやありませんか。」
公「あれは唯……女です……色々な……方々の……」
美「柳橋や新橋や。」
公「いゝゝゝ年寄や子供や。」
美「お酌や藝者や。」
公「そんなもの、決して……卑しいです、機械が汚れます。」
美「でも浮世畫は大抵遊女でせふ。」
公「それは何です、私ドやない、畫かきが卑しいから。」

美「それをどうしてお集めなすつたの。」
公「でも……でも……外にありませんからネヘ、好いのがあるまで、好いのを書かせるまで、なぐさみに、據無く。」
美「ヂヤ私のも好いのが出來るまでのおなぐさみですネ。」
公「いゝゝゝあなたのが何です……それを其……書かせるまで。」
美「ヂヤお婆さんになつたら願ひませふ。」
公「おせ〳〵」
美「でもおなぐさみのお邪魔をしちやいけませんから。」
公「いゝゝゝ……いゝゝゝ……あなたのが出來たら……皆捨てます。」
美「それドや幽靈になつて、應擧のよりこわうございませふよ。」
公「幽靈も皆燒きます。」
美「燒く——畫の幽靈は消えないからつまりませんネヘ。」
剛平正憲話しながら來りぬ、正憲早く見とめて、「美津子さんあなた一つ舞を見せて下さい。」

美津子は唯笑むのみ。公好も口を合せ、

公「さうだ、あの三保の松原で天人の舞を。」

正「天人より芳野の靜御前が好い。」

剛「いつそ清水の舞臺から飛て見せるかネ。」

正「舞臺から飛ふのは我輩の事ドや。」

剛「ワハ、、、、、、」

正「ワハ、、、、、、」

黒瀬も來りて、「何です、舞ですか。」

正「君は笛を吹くが好い。」

剛「私は鼓でも打たふかネ。」

才「銅拍子は西山さんだ。」

公「それは鶴が岡でせふ、芳野なら坊主相手で。」

才「坊主とは役不足だ。」

剛「丁度好い安立が居る。」

才「安立ドや始まらない、矢張鎌倉武士が必要です。」

正「イヤ文覺も入る、兼實も入る、廣元も入る、泰信も入る、秀衡も入る、景時も入る、稻毛も入る、公曉も入る。」

美津子はすかさず、

「ですが靜が慕ふのは義經ですネへ。」

剛「それは誰だ、此邊には居そふもないネ。」

才「馬光世を見つけて、一向に辨慶の痩せたのが居る。」

皆「ワハ、、、、、、」

光世は嚇となつて家に歸りぬ。

第十二章　同し男か

厭はドとすれは疲る、疲れては夢む、夢みては、懼はる、光世は幾度か止めんと思ひぬ、されど止めなば口は乾かん、外に何を——

才馬が撰擧競爭烈しくなりて壯士足らず、或日光世に勸めぬ、壯士は如何。

公好が寫眞癖つのりて寫眞雜誌を出さん企あり、校正掛は如何。

賴堂が禪宗倶樂部未だ成らす遊説員は如何。

口は少からねと勸められて腹立つばかり。職工の方猶優れり。竹野も今に手仕事止めす嫁の望孫の樂あきらめ、休の日に終日子と暮すを唯一の喜としてまた機嫌よく、けさの霜雪の如きも、未明に起きて光世腐れし古井の水を汲めば、母は壞れかゝりし竈をたきつけ、光世昨夜の殘飯に茶かけて食ふ間に、母は辨當をこしらへて與へぬ。油染みし筒袖と着かへるを眺めて、

「寒くは無いかい、けふは風があるよ。綿を首へ卷てお出て。」

「ヘイ、しかし大分馴れましたから。」

「雨の音がする、風に雨ゞやたまらない、それに傘が大分破れて居るから濡れると毒だ。さうだ、これなと着ておいでよ。」

古き合羽取り出せば、これには流石に迷惑なり。

「これ位によろしい、かまひません。」

「でも雪になるかも知れない。いつそれ休みな。」

「なあに工場は却て暖いです、外と温度が違ひますから、夏はたまらないといふ事ですが冬は樂ですよ」

實は懐の寒きなり。

「かう物が高くなつちや困りますネヘ。」

「本當にさ。少しづゝためて、お前に羽織でも一枚こしらへよふと思つて居るんだが。中々いつの事だか。」

「羽織なんて入りますものか。此ぼろ服の上へ着たら茶番になります。」

「でも一枚は無くつちや、出る所へ出られやしない。」

「出る所て。工場の外にありやしません。」

母は默しぬ。

「それよりか病氣になつた時、借金にならない樣にネヘ。」

「そうだ借金程恐ろしいものはないよ。一度借りたら中々返へせなくなつて、利息はかさむ、復借る、復返せない、しまいには家も取られ、道具も取られ、權式も、品格も、何もかも無くなつてしまふからネヘ。」

「本當に奴隷ですネ——一錢でも借りやしません。」

「手足の動く間はだうなりとしてネへ。」
「しかしけふはだうです、わ手の痛みは。」
此程より筋々痛みて、時には忍ひ難き事もあるなり。
「なあにそれほど……だうも寒いとネへ。」
「これから段々寒くなるばかりですから、まう仕事なんぞわ止めなさいまし。本當に今度こそは是非。」
「そんな事をしたら尙暮しがネへ。」
「いゝえ私の賃錢丈でいけますとも、十分な事は出來ませんが……其日位はいけます。」
「其日位いけたつて病氣にでもなつたら。」
「其時はまただうかします。」
「だうかつて借金になるドやないか。」
「いゝえ外に——体は自由に動かなくつても、頭は動きます、死ぬまで動きます。」
「其頭を使はないのドやないか。」

「エ……其時には……使はなくつても動くかも知れません。」
互に無言、暫くして光世は奮ひ。
「けふからは私一人働きます、私の手で母様を養ふと思ふと、元氣が增します、勇て働けます、寒さもつらさも何でもありません。是非さうさせて下さい、あなたの爲でなく、私の爲です、体の爲です、頭の爲です。」
母は涙ぐみぬ、忽ち鳴る滝笛の響に、光世はあわてゝ走り行けば、母は跡を見送て長く食事も爲さゝりけり。
光世は遲刻を叱られて、工場に入るや否、直に勞に就かんとすれば、仲間の一人待受けて「豪氣じやないか、黑瀨樣は。」
「黑瀨がだうした。」
「衆議院で大演說をやつたよ。」
「まう當撰したのか。」
「それも知らないのか、本當に仙人だネへ。此間の撰擧だつて大變な騷さ。己等は一寸見に行たが、丸でいくさだネへ。巡査は張て居る、壯士は屯して居る、車は走りま

はる、人はごた〳〵する、今に大喧嘩が始まるかと思つて居ると、そんな事も無つたが、相手の奴は打たれたとかいふ事だ。打たれた上に負けて、身代はつぶして、こんな馬鹿はネへ。」

「勝つたつて五十歩百歩よ。」

「なあに勝つて議院へ出るとなると尙黒瀬樣のものだ。初日から演說をして大層幅が利くぜ。」

「それでも奴はどの政黨へも這入つて居ないだらふ。」

「そりや知らないが引張合になつて居るといふ事だ。」

光世は思ひぬ、自由主義、民權論、口に筆に唱道して、熱心に奔走し、あはれ議會開設の曉は重なる議員となり、議長となり、大臣ともなるらんと敬重せし彼人々は如何になりけん。或者は病死、或者は客死、或者は牢死、或者は落魄、或る者は變節、屬吏となるあり、商人となるあり、政黨に在るもあれどまた力無く、力有るはきのふの人に非す、指を折れはそも何年、人生五十と云へどそれさへ長きか、短きか、遲きか、早きか、されど職工とまでなりしは無らん。

彼男は羨ましげに、「己等もちつとしやべれたら出て見たいもんだ。」

「出て何をいふつもりだ。」

「いふとも〳〵 第一に賃錢を上げて下さいつて。」

「ハヽそんな云樣をしちや議員ドやない、矢張職工だ。」

「イヤ笑ひ事ドやない、昨日の演說も工場の事よ。」

「さうか跡で新聞を借りて見よふ。」

晝休の時見れは工業法案なり。黑瀨は滔々數万言、先つ勞力者の重んすへきを說き、一轉して資本家の更に重んすへきを唱へ、二つの關係は主從にもあらす、敵にもあらす、朋友なり、共同なり、一方を損して他方を益せす、利害相反する樣に思ふは誤なり需要增す時は供給增すへく、供給增さんとせは勞力者を增し、賃銀を增すへし。卽ち資本家勞力者共に富むなり。衣食足て禮あり、學あり、勞力者賢くならは資本家も優待せん。待遇は互の情にあり。法律を以て定むる所程度あり、それより先は干涉も無益なり、事實は獨り進む、要するに需要にあり、富にあり、國家の富にあり、世界の富にあり、獨り資本家のみを苦しむるは誤なり、經濟問題のみにあらす、敎育問題なり、

教育制度また考へさるへからす。道德問題なり、道德の標準如何。宗教問題なり、哲學問題なり、人生問題なり、孔子釋迦基督を委員として附托するに若かさるへしと冷評一番して終る。彼男も拾ひ讀みして、

「つまりだうしやうといふんだ」

「つまりだうもしないんだ」

「でも敵でなく朋友だといふドやないか」

「だから賢くなくつちやいけないとよ」

「ヂヤ馬鹿だといふのかい」

「馬鹿とも云はないが、マア金でも溜めて、勉強しろといふんだらふ」

「金を溜めてといつて、日に二十錢や三十錢の賃錢で溜る譯がないドやないか」

「だからまうかつたら增してやるとよ」

「それが當になるものか、馬鹿々々しい、そんな事を云つてるのか、イヤ此方等は年中動きづめて窮々云つてるのに、向は座つてゝ藏を立てる、いつそ金といふものを止めてしまへは好い」

「そしたらまたいけないよ、皆が同し働をして居ないから、餘計に働くものが困らあ」

「ヂヤ何かい、今では餘計に働くものが餘計にまうけて、働かないものは錢が無いかい」

「それは中々、決してさうドやない」

「それ見ネへ。だからそこの所をよくしたら好いんだ」

「しかしそれは誰がしたら好い。聖人を代議士にした所で、此澤山の仕事を見分ける事は出來まい、それも日々樣子が變つて行くんだから、何を目安にしたものだらふ。需要にすると同し事だし、勞力にしても結果と相應するものドやなし、仕事の性質にしても、何が貴いの賤いのて極められるものドやない、それとも皆組合をこしらへて、其中できめるとしても、其組合丈で濟むものは無い、皆外のものと關係して行くんだから、組合で極めたつて世間で行はれなけりや何にもならない。それに仕事によつちや自分ばかりにしか分らないものがあるからネ」

「面倒な事をいふドやないかヂヤ皆同し仕事をすれは好い」

「ヂヤまた困る。」
「誰が困る、皆同ト人間じやないか。」
「人間は同ト人間でも、二人と同ト人間は無いよ。」
「どこが違ふ、口は皆一つだし、手は二つだ。」
「處が口の上手なものがある、手の強いものがある、頭の賢いものがある、心の善いものがある、それを皆同し樣になれと云つたつて出來ない。」
「始めから其つもりなら出來らあ。」
「黑瀨の眞似は出來るが、基督の眞似は出來ない、セクスピアの眞似は出來ない。」
「なぜ出來ない。」
「それが分らないのだ。釋迦にも分らないから、黑瀨如きに冷かされるんだ。」
「でも黑瀨と己等は餘り違うまい。」
「それは大した違ひはない、向は議員になる、此方は職工になる丈違うんさ。」
「一返奴も職工にして見たら好いだらふ。」
「なあに僕程困りやしないよ。」

「何だか君のいふ事も分らないネ。」
「マア〳〵冷飯でも食はふトやないか。」
縱覽に來る者あり、帽も脫かす獺虎綠の外套ふくだみたれど、顏の瘡は隱れず、光好なり。意氣揚々として案內するは才馬なり。これが英吉利製の精紡器、これが亞米利加製の發電機、孟買の綿、西貢、支那、埃及の產——ばた〳〵とかけくる千吉、何に驚てか立止る、はづみにかたげし籠を落しぬ。處ならす散る大雪。公子は綿の粉だらけなり。慌てゝ目を見張るばかり、才馬早く身を引きしが、杖上けて千吉の橫顏本の音するまで打叩きぬ。
「馬鹿——何をするんだ。」
千吉ハ逃けもせず、才馬を一寸見しが、また笑ひもせず公好を見る。
「けしからん事だ、不禮とも何とも云ひ樣が無い——早くあやまらんか。」
千吉は見つむるのみ。
「なぜ默つて居る。貴樣啞か。それでも人間だろふ。物を云へ。」
千吉は猶無言。

「剛情な奴だなあ。事務所へさういつて罰を當てるぞ。」

千吉は走り出しぬ。こらと捕へて引倒し「貴樣何といふ名だ。」

猶答へず。

「どうも小僧を使ふとこれで困ります」と公好に嘆く。公好は綿を拂はんとして帽を落しぬ。塵を拭はんとして目鏡を落しぬ。袴を正し、後を顧りみ、やう〳〵目ばたきニつ三つして、屹と見しは潮田の庭なり。あはれ美津子は出て居たりき。向よりは見ゐもせぬに、慌てゝ次の間に入りぬ。首筋に尙一つ綿を殘して。

才馬も續て行きぬ。千吉は立たんとして、見れは前に皮の紙入、今の騷きに落しゝか。手早く攫みぬ。籠も捨てゝ飛行きぬ。光世は思はず突當りて。

「オ千ちやん、おしがさんは。」

耳にも入れず外に出て行きぬ。

第十三章　同し女

光世は姉の事にやと、仕事はつるや否寄宿舍を訪へは、しがは病室にありといふ。驚て、行きて見れはしほれて柱にもたれて居り、片手には繃帶かけたり。

「どうしたの。」

「オヤ」と顏を赤めしが、しがは嬉しげなる面持なり。

「怪我をしたネ、どうして。」

「昨夜機械に卷かれまして……指を……」

光世はぞつとしぬ「見せて御覽。」

益々赤くなりて、出さず。光世はつく〳〵打眺めて「痛むかい。」

「エイ。」

「父樣は足を折り、お前樣は手を——」

と云ひかけて由無き事をと、心付けはしがも俯むく。けふは殊に小さく見ゐたり。塵にはまみれねど色さめし寐卷に細帶、汚れし夜具に座りて、側には肺を病む者眠りて居り。見まはせば繰無き疊、古木を削りたる柱紙破れし窓の外には植物の影もなく、僅かに洩る日の光に、塵埃著しく躍る。藥茶碗洗ひもせず、洋服は片袖血つきたるまゝ、壁にかゝりぬ。いつか遠目に見し美津子の桃色の洋服を思出せは、しがは突然、

「社長様のお嬢様にいよ〳〵御養子が極りましたつてネヘ。」
「エヽ誰に。」
「飛鳥井様のお妾だとか、お嫁にいらつしやるんだとか、聞ましたが、矢張御養子で黒瀬さんを。」
光世の色は變りぬ、しがの色も變りぬ。暫くは互に言葉無りしが、稍あつて、
「徳な方だ。」
光世はムッとしぬ。
「お前もあんな内へ貰はれて行くが好い。」
誤解されしくやしさ、しがは恨めしげに見上けたるが、涙はこぼるゝばかりなり。
「だうしたの。」
しがは痛き手にて目を拭ひ、吃と横を向きしが、また涙は滿ち來りぬ
「怒つたの。」
「いゝね。」
「惡い氣で云つたんじやないお前樣だつて同ト女だもの。」

しがは手早く顔に袖當しが、泣く聲は聞えさりき。
「だからまた仕合せが來るかも知れない。」
「一生ありません。」
袖を取りしが其顔は青かりき。
「そんな事が分るものか、しかし本當を云へは金持の家へ行くよりは、相當な亭主を、正直な、働きのある、情のある亭主を持つのが一番好い。」
「持ちません、一生持ちません。」
「なぜ。お前なんぞは容姿が好いから、それでも賣口はあるだらふ。」
しがは唇を嚙みぬ。
「私も心がけて置こふ、矢張職工かネ。」
しがはワッと聲上けぬ。光世は驚て打守れは、俄に止めて隅へかけ行き、疊に伏して忍音に泣く。
「ヂヤこれからどうするの。」
しがは突かれし如く顔を上けしが、壁を見つめて思ふ樣なり。

「まう其手ドやこゝの仕事も出來まいし、外の職だつて右の手を使はすに出來るものはありやしないそれ矢張どつかへ貰つてもらわなくつちやならない。」

「行きません。」

「デヤだうして暮される。」

「だうでもようございます。」

「色男。」

呼ふは外を過く男工の聲なり。しがは顏を赤めぬ、光世は少しく不快を覺ゑて、立上らんとする折から、がた〳〵と入來る一群、先なるは監督人なり、小使に引立てられ、後れ勝なるは千吉なり。監督はしがに向ひ、

「これはお前の弟だネ。」

しがは怖ろしげに「だうか致しました。」

「だうも不埒な事をやつた、警察へ渡さなくつちやならない。」

しがは青くなりて千吉を顧みぬ。

「けふ西山樣が縱覽にお出になつたが、非常な不禮をした、それは勘辨を願つてもすむが、濟まないのは窃盗だ、紙入を盗むだんだ、しかも大切な、佛蘭西の貴婦人の肖像と、外に貴重な品が這入つて居るのを盗て賣つたといふ、怪しからん事で、非常に御立腹だ。無論警察へ出すのだが、一應お前にさう云つて置く。」

しがはぶる〳〵と顫ひしが、千吉の側にすりより、

「どうしたの、其紙入は、いくらに賣つたの。」

「一圓に。」

「一圓――そして其お金は。」

「天麩羅屋でネ、釣を取らふとしたらネ、追ひかけて來たもんだから、置て逃げ來た。」

しがは俯きしが、思案よりは絶望の樣なり。監督も見て取て、

「一圓の金も出來ないかな。デヤそれまでだ。しかし是非共其紙入は取り返へさなけりやいけないから、金は此方から出す、が、其代り罪は免さない。また兄弟が赤い着物を着たつて、何ともあるまい。」

しがは手をふるはせし、が、若しお金をこしらへましたら。」

「それは子供の事だから免してやる、それで知らしてやるんだ。だが急に、とても出

來そうもないな。」

げに急に、とても出來す、しがは情無げに千吉より我と我身を顧る光世は側に忍ひさりき。進み出てゝ監督に「ヂヤ其金をこしらへて取返しますから。」

「出來るかネ。」

「出來なけりや私がしませふ。」

しがは光世を目に拜みぬ。

「ヂヤ早く、直でなくつちや、また外へ渡るから。」

「直には私も出來ないが、だうか三日四日。」

「かうしようこれから直人をやつて、此方で取戻すから、金が出來たら此方へお出しなさい。しかし余り長くは待たれないネ。」

答へも待たす小使つれ、云付けなから出て行きぬ。

しがは何か云ひたげなりしが、耻ちてか恨みてか喜ひてか、言葉は出てす、光世は立て様に出て、

「余り心配しないが好いどうかなるだらふ。」

行きかゝれは追ひすがりぬ。

「どうぞ一生……」跡は聞ねす。

「アきやうだいの様に思つてお出で。」

しがは顔を上けて光世を見つめぬ。喜と賴みとは光世にも通ひしが、尙少しく冷かに覺ねぬ。絶望の上の色なりしに。

第十四章　旋風

光世の當は潮田なり。己も一圓の余裕無れは、しがの負傷を社長に說き、今後の手當を得んと思ひぬ。されど今は歸りしなるへし、事務所に問へは家にといふ、家に問へは妾宅にといふ。翌にせんか、晝い最も多忙の男、あなたの會社、こなたの集會、誰の邸、彼の家、三分の暇得るさへ難し、寧ろ今か、されど妾宅、されど秘密にもせぬ所、されどされどゝ迷ひながら行く。塀高く、奥深く、庭の木立のみ現はれて、二階造燈も洩らさす。門は明きたれど外に待つ車、彼のか人のか、猶も之入らす。

内には妾も遠さけて剛平才馬秘密に語る最中なり。

「きのふの演說には感服した。」
「なあにほんの朝飯前です。」
「イヤどんな法律が出來たつて、實際の所はどうでもなるからネヘ。」
「さうです、それよりは海外の摸樣がだうもいけませんネヘ。」
「これには困つた。內地だけならだうともやりくりが出來るが外國の買收は出來ない。」
「イヤ向では向の奴がやつて居ますよ。」
「だからそんな連中と聯合したら好いんだが、まだそこまでは進步しない。」
「たう〳〵宣敎師は殺される、佛蘭西は戰爭にする、支那は飢饉になる、印度はペストがはやる十一會社もいけない、丸八銀行もいけない、これでは富國にも及ばしますネ。」
「及ぼす所ドやない、とても持たない。」
「持たない」
「とても持たない。飛鳥井も心配して居るんだ。生憎と外務の辭職に、競爭がアヽ烈

しくつちや、どうやら總くづれになりさうだネヘ。」
「だうか出來ませんかネヘ」
「一つ策があるがネ。」
「どんな策が。」
「あの西山さ——あの男頻に來る、目的といふのは卽ちれ美津で。」
「美津子さんを。」
「既に脇から持てまはつて、くれんかといつたが、あれは養子をするんだといふと、そんなら行つても好いとまでいふ。」
「あの馬鹿が。」
「馬鹿でも何でも金を持て居る。」
「いくら持て居たつて用る事を知らないから矢張馬鹿だ。」
「だから此方で使つてやろふと思ふんだ。」
「でも金ばかりで好い、金さへありや好い——君も追々高名で、世間でも賣れて來たか

ら私の所へ來て貰つても耻かしくない所か、お互に都合が好いが、それは先の事で、今はお互に都合が惡るい。私が倒れりや、折角賣出した君の名前も折れるし、飛鳥井も閉口する、何分金さ。金さへありや譯が無い。其内に景氣が直つて、愈々飛鳥井の世界になる日にや、此方も大盤石、君の名前も日本中、イヤ世界に鳴るだろふ。」

才馬い俯して物云はす。

「名を賣るとこれがつらい。私は名前なんぞはどうでもいゝと思つて居るが、私の名前で立て居る會社はさうは行かない、私か倒れちやばた〳〵だ。跡は大抵平家の公達と來て居るからネ。それに飛鳥井でも、君でも加藤でも、小西でも、太閤でも軍用金がなくつちや仕樣が無いドやないか。」

才馬は猶も思案に暮る。

「女なんぞの事をくよ〳〵思つて居る奴程馬鹿はない。女といふものが抑々馬鹿なものだ。ほしがるものを當てがつて、少しはかり贅澤をさして置きや、それで濟むんだ。淀君だつて、政子だつて、好い男を取りかへ引きかへ當てがつて置きや、いくさにも何にもなりやしない、どうも昔の奴は野暮だよ、其段今の人は開けて居

るネヘ。」

才馬は猶も答へさりき。

「私も若い時は女で食つて居たが、其また女を食はす奴があるから妙だ。さういふ奴は中々多い、大抵それだネ。だから譯は無いんで、今にまた別品を見つけて來るから、君も氣長く待て居たまへ。」

剛平は大笑す。妾は酒肴を持て出れは、醉ふにつけて戯言百出、才馬いつも程快活ならす、暫くして辭して歸りぬ。光世は代つて面會を求むれは、其座に引きて其儘逢ふ。しがの事負傷の事今後の事、手當の事、光世は勉めて說きたれと、剛平は酒氣紛々、果ては眠氣を催す体。光世は更に一歩を進めて、一般の賃銀を增すへしとまで踏込みぬ。剛平は顏を上け、

「君は僕の叔父だ、イヤ僕が叔父だ親類だ、親子も同然だよ。だから云ふがネ、これは極秘密だ、他言しちやいけない、他言する樣な男でないと見込て云ふよ。實は社は持てなくなつて居る。職工所ドやない、株主が困て居る。職工の困るのは家賃が高いとか、米が高いとか、酒が呑めないとか、女が買へないとか、高が拾錢か貳拾錢の

事だろふ。株主のはさうドやない、高が大きいよ。飯が食へない位は何でもない、自分ばかりか方々飛た所まで、倒れるんだ。此困難といふものは容易ドやない、そりや女の手や首がちぎれた位の騒きぢやないや。ハヽヽヽヽイヤ戯談ドやない本當だよ。本當に困難だ。そこを甘く切抜けたら、自然職工までよくなるよ。賃金も上けやふし、手當もやろふ、褒美もやろふ、酒も呑ませさふ、女も買はさふ、手も首も次てやろふ、が先つ株主だ、先つ社の方だ、それから酒、それから女、これが順序ドやないか。女ばつかり可愛がつてちや社が持てない。社が倒れちや、職工も食へない、女はだうする。心中でもしなくつちやなるまい。ハヽいやつまり社と株主と職工は一家だよ。本當にさう思つてくれなくつちや困る。まして君は叔父だ、イヤまた違つた、僕が叔父だ子。だから君に相談するが、だうしたものだろふ、今の仕末を。」

光世は唯顔を見るのみ。

「今も黒瀬にいふんだ、先生お美津にはれて居るんだが子。」

光世は俯むきぬ。

「遠から養子になりたがつて居て、既に表向の話になろふとした所へ此仕末さ。」

光世はまた顔を上げぬ。

「所へまた申込て來たのは西山で、此熱心は大變なものだ、百萬でも二百萬でも持て來やうといふのだから。」

光世は更に目を見張りぬ。

「そこで黒瀬にさういつて、おきらめさそふとしたが、彼奴も馬鹿だ、兎角未練があつてネ、いつもに似すぐづ〳〵して居たが、流石に才子だ、名にはかへられないか、笑つてしまつたよ。ワハヽヽヽヽヽヽ」

剛平はまた一杯を傾けて、「だうだ君は女は好きかネ。」

光世は赤くなりぬ。

「堅いばかりドやいけないよ。だが女工なんぞに相手になつちやいけない。しかしおしがは別品だネ。」

光世はむつとしぬ。

「今に好いのがあつたら世話をしやふ、何が好いネ。」

光世は益々腹立て歸らんとすれは強て引止め、

「お母樣があゝいふ風ドや、職工なんぞは氣に入るまい。商人も卑しいだらふし、士族より華族のお姫樣かな。西山が來たら相談しよふ、あすこにお美津と同し年の妹があるがネ。」

光世は答へす外へ出てゐ。

第十五章　花輪

云ひ難き心地なり。嘲笑は今に始まらす彼の常としても、美津子に養子、才馬かと思へはまた轉して公好とは。

取らるゝなり、取らるゝなり、理想、人に取らるゝなり、取らるゝ上に余所に見て、光消にたる現の機械、止めん、止めん、翌よりは足踏みせド。

されとこれも社の爲なりといふ、社の爲は職工の爲、これも一理。資本家の事は知らねと、勞力者の爲にもなるといふ此結婚、美津子さへ承知ならば咎められす、仲間の爲なり、貧民の爲なり、多數の爲なり、まして我戀はよの常のものに非す。

さらは今まで何を思ひし。唯愛するといふばかりにてよかりしか、報酬を望まさりしか。熱情は俄に燃ゆ。こは自愛なり、誠の愛にあらす、我を捨てゝ愛するものゝ爲のみを思ふそ誠の愛なる。

されど彼公好、無學なり、無能なり、愚なり、醜なり。美津子と並へては何たる不當そ。我事は捨つるとするも、美津子の爲に恨むへし、美津子の爲に悲しむへし。

否否否、理想なり、理想なり、現實の人に非す、人は如何にもならはなれ、理想は變らド、我は變へド、我爲にはいつまでも理想なり、いつまでも理想なり。

忽ち打擊、耳のあたり。

驚て顧れは、逃けて行く後姿、同し社の男工なり。先に色男と呼ひし者か。憤よりは心惡るさ、幾度か思ひかへせど足は進ます、引きづる樣に歩む。

「夫れ達人は達觀す。」

また驚けは編笠かぶり書生羽織着たる男本を打て大聲に歌ふは何の新体詩にや。正成卿に石盤書、七冊つけて三錢々々、さても廉なりと立寄れは夜店色々。八面玲瓏たる行燈に記臆法、これも十錢に上らす。五錢の石硯、色はげたる赤洋服着て、一心不亂何でも大安賣三錢五厘、げに呼聲も早枯れたり。五厘の肺量試驗器の陰より、心細

氣に吹く尺八前にも並へて値を誌さゝるは誰の果にや。古本屋の店こそ混雜なれ。論語も、梅暦も、讃美歌も、訴訟法も、品行論も、太閤記も、自治論も、幡隨長兵衛も、利學正宗も、氣海觀瀾も、靖献遺言も、富國論も、古今集も、猿蓑も、西洋事情も、唐詩撰も、心經も、膝栗毛も、立志編も、社會學も、人權論も、孝經も、明六雜誌も、共存雜誌も、鶏鳴雜誌も、國友雜誌も、花月新誌も、團々珍聞も、歌舞妓新報も、何もかも一切無差別、平等に塵を浴ひて、偶々手に取らるれは二錢三錢まけよまけぬと爭はる。あはれ洋燈の臺にせらるゝは光世の雜誌。匆々に立去りぬ。古着古道具また覗かす、古くさき飲食店の間を過れは、聲かくる飴屋は和助、隣に住む男なり。

「どちらへ。」

「内へかへるんです。」

「ヂヤ一所に、私もしまひますから。」

此男いつも好き機嫌なり。京生れとか、げに長き顔家業より稍品あり。頭大に禿けて、髮は後の方に少しく殘り、目圓く、鼻高く口笑を含て、顎長く、色はよく日に燒けたれと光澤あり。子供相手に三厘五厘の商賣、よく行ける事と思へと悲しき顔もせす。いつも日なたに店を出して、客無き時は過行く車を見る。女の子には殊に目をつけ、美しき衣着たるには獨笑む。子供うるさしとかこつものあれは、そんな事いふものでないと飴一つくれる親切。市五郎葬送の時も、光世に次て力を貸せしは此男なり。光世は心安き人の事とて、話しながら並て行く。

「どうです、まうかりましたか。」

「なあにいくら賣つたつて高が知れてますからね。何かもつと好い商賣と考へてるが、何もかもやり損つた跡だからネへ。」

「本當に好い仕事て無いものだネへ。」

「マアだうかこうか行けりや變へない事さ。其内にお迎ひが來るから。」

「お前さんなんぞは百まで活きなさるだらふ。」

「だうして〳〵体も弱し、氣も弱し、五十まで活きたらまうけものさ。」

「でもまう手が屆いてませふ。」

「マアだうかこうか潰きつけましたが、跡の二つ三つが中々苦しい。」

「イヤ柳の枝に雪折無しといふからネ。」

「其代り枯れまさあな。丁度隣の市五郎さんと同し年だが、あの人は松の方で一ぺんに折れた。」

光世はしがの事を思出して、詳しく話せはいたく憐れみ、

「親は無くとも子は育つといふが、中々育たないものだねへ。親があつても育たないのだから。」

「これからだうしたものでせふ。」

「されは右の手が使へなくつちや、職は出來す、下女にも行かれす、お嫁にも行かれないネへ。」

「また市五郎さんの樣にぢつとして居たつて、千吉では自分丈がむつかしいんだからネへ。」

「かうなつて來ると、先へ地獄へでも行た方がましかネ。」

「地獄ドやたまらない。」

「なあに私なんぞは此世から鬼に責められて居るもの。」

「鬼とは誰の事だい。」

横より云ふは差配人なり。和助は驚て立すくみぬ。差配人はやつきとなり、

「人を鬼と云ふが、鬼が無つたら本當の地獄へ落ちるドやないか。」

「御尤で、イエ決してあなたを鬼と申したんドやございません。」

「貸す方が鬼なら、借りて返へさないのは、泥棒だ。泥棒には用捨は出來ねへ。」

「いゝえ返へさないのドやございません、返へせないので。」

「返せなかつたら返さなくつても好いのかい。まう理屈は聞かねへ正月は鼻の先だ。店賃が三月に、貸金が元利積つて三圓五十錢。今まで待つた丈でも余程お慈悲だ。まういけねへ。私の方は兎も角も、宗匠に濟まねへ。いくら風流人でも、大金を只くれないせ書替も度々だ。まう此瀬戸はそれでは通されないねへ。」

「御尤で、是非——明日か、明後日——」

「デヤからしやふ、あしたの晩行くが、其時は何でもかでも片をつけるから、さう思つて居ねへ。」

つぶやきながらあなたへ行く。光世は避けんにも避けられす、口入れんにも言葉なく、暫く無言につれ立つ中、漸く家に歸り着きぬ。別れんとすれは和助は止め、

「まあお話しなさい、獨身といふものはさびしいものでネヘ。」
云はるゝまゝに共に入りぬ。和助は先つ火をともせば、光世は共に手傳ひなから、
「お前さん始から子供は無いんですか。」
「二人ありましたが、悴は一昨年死に、娘はやりました。」
「どこへ。」
「なあに去る所へ――仕合せな奴、馬車に乘つて。」
「それは妙だ、どうして。」
「お前さんだからお話をするが、私も元は粟田で、陶器をやつて居ましたが、御維新から此方段々いけなくなつて、それに西洋と貿易が開けて來ると、また好みが變りましてネヘ。素早い奴は西洋の藥を使つて、西洋向の色を出しますから注文も殖えませうが、私はしない、それでは粟田燒ドやない。本當の粟田は卵子の樣な色です。それを段々白くして、薩摩燒の樣になつたが、厭ドやありませんか。だかそれでないと賣れないので、私等の樣に昔の儘をやつて居ると、さつぱりいけなくなつてしまつて、得意は無くなる、注文は來ない、借金は出來る、稅は殖える、諸式は高

うなる、さうかうする中に十五年の大不景氣、十六年の暮にはたう〳〵店を仕ましたか、引續て女房には死なれる、悴は徵兵を嫌がつて逃出す、どゞの詰り、娘を祇園町へ見習ひにやつたら、去る金持の目に留つて呉れんかと云はれる。何になさると云つたら、娘にするとおつしやる、夢の樣な仕合。お辭義の百もして一生不通でやりました、其時貰つた金で木綿屋をしましたが、また損で、たう〳〵江戸三界まで流れて來て、飴細工とは馬鹿氣た話さ。その飴屋も當時は色々な風をしたり、馬鹿な歌でも唄はなくつちやいけない樣になつて、私の樣にだまつて居ちや、子供も買はないとは、どこまで世智辛い世の中でせふ。そんな事を思ふといやになるが、また娘を貰つて下すつた旦那の方は段々仕上けて娘も立派に、馬車で通りますよ、いつかも見たが、綺麗になりよつた紫の――」
「御免。」
小聲に音なふ女の聲。和助は止めぬ。
「どなた――おはいり。」
そと明けて入る紫の肩掛、先つ驚けは「お父樣」

和助は目を見張りぬ、光世も驚きぬ、美津子なり。
美津子も光世にハッとせしが、肩掛取りて黒縮緬の羽織、胸のあたりを隠して立つ。
和「どゞどうして。」
美「一寸お目にかゝりたくつて。」
和「でも――まあお上り。」
美津子は光世にも會釋して上りぬ。暫くは皆言葉なかりき。稍あつて美津子が「久しくお目にかゝりませんでしたネヘ。」
和「イヤ見ました、いつか紡績の開業に。」
美「オヤさう、ちっとも知りませんでした。いつも氣をつけて居るんですが。」
和「どうしてけふは――よく知れた子ヘ。」
美「遠から知つて居ます、光世様に伺つて。」
光「さう〳〵いつかお尋ねなすつた、そんなら貴女が――」
和「光世様も知つて居るのか。」
美「今では從兄弟になるのです。」

和「こりや實に不思議だネヘ――丁度好い、これから始終噂が聞かれる。」
美「いゑまうこれぎり――美津は俯むきぬ。
光「噂といへば今度はお目出たいのですネ。」
美津は顔を上けて吃と見しが、「光世さん、あなたに伺ひますが、名ばかりの親でも矢張親ですか。」
光世も顔を眺めぬ。「名ばかりつて養父になつて居るんなら同し事ドやありませんか。」
美「いゝゑ、それも名ばかり。」
光「といふとだういふのです。」
美「戸籍丈で内ドや……」
光「戸籍が親なら親に違ひありません。」
美「法律て厳なものですネヘ。」
和「法律でも道理でも同し事ドやないか。」
美「いゝゑ違ひますよ。」

和「だう違ふ。」
美「だうつて理屈は知りませんが、違ひます、皆違ひます。」
和「段々むつかしい世の中になつて、法律の、規則のと、薩張分らないが、マア〳〵悪い事さへしなけりや間違はあるまい。」
美「いゝえ間違ひますよ。此方は悪い事はしなくつても、向があんまりでは。」
和「誰が。」
美「エ。」尙小聲になり、「あなたいくらお貰ひなすつたの。」
和「いつ――お前をやる時か――百圓。」
美「わづか」涙ぐみぬ。
光「それから何年になるんです。」
和「足かけ六年になります。」
美「六年でも、七年でも、嘘にも親らしけりやまだしもだが――」
和「どんな風だ、内ドや。」
光「大事にして居ませふ、あなたの事はなんでも聞くから。」

美「それが親ドやありませんから。」
和「なゝゝせ。」
美「お父様、私はまう歸りません。」
和「どうして。」
美「光世さん、御存知でせふ。」
光「御養子の事ですか。」
美「いゝえ、今までの工合を――急度噂になつて居ませふ――唯の娘といふのドやありませんから。」
和「それでも娘にするつて。」
美「それは始の内丈で、其時分は芳原の女郎か這入つて居まして、それがきつい女で、大分いぢめられましたが、其人が壯士役者に狂つて出されてから、いつもお酒の相手をして居ますと――名月の晩――あんなびつくりした事はありません。振切つて庭へ飛て下りて、池へ落ちましたそれからはまう手出しはしませんが、お客があるといつでもお酌に出します。お客も中にはあの飛鳥井なんぞは素性を知つて

居るのか、時々失禮な事をいひまして。まだあなたはいらつしやらず、だうしやうかと思ひましたが先の人で覺ゐました弱くなつて居ると尙つけ上つて、勝手な事をされるから、わざと氣儘に、いつそ追出される方が好いと厚かましく出ますと却てよくされます。此節は仕方を變へて、色々なものを讀て、何でもむつかしく、面白くない樣にとして居ますが何、にもなりません。」

光「それにどうして西山を。」

美「それも魂膽のある事で、始めは飛鳥井を釣ろふと思つたんですが、私が逃けたものですから、向でも手を引きますし、それでなくつてもまう切れない樣になつて居ますから、今度は黒瀬にすると云つて居たさうですが、眞からで無いか、また飛鳥井と相談して西山にしたんです。」

和「それはマア。」

美「いゝゐ馬鹿なんで、六年とか佛蘭西へ行てゝ、何一つ出來ず、地獄ばかり買つてたといふ樣な人で。」

和「そしてまう極つたのか。」

美「エイだから厭で〳〵けふも飛鳥井が來て其事ばかり。溜らなくなつて出て來ました。」

和「そしてだうする。」

美「暫く隱して置て下さい。」

和「馬鹿云ふな、直に知れるよ。」

美「知れたらだうするでせふ。」

和「そりや何でもかでもつれて行くに違ひない。」

美「だつて親で親で無いんですもの。」

和「親でなくつても親だ——アさうだなあ、己の樣な貧乏人の娘を大金持か唯養子にする筈がない。何か目當がなくつちや——イヤそんな結構な所から來る人なら仕合せドやないか。」

美「でも厭な〳〵癖かきですもの。」

和「癖かき——イヤ今時藝者買をする位の人は大抵癖かきだといふ事だ。」

美「だつて一生——」

和「一生仕合せだ――米は高くならふが、物は高くならふが、値も知らず、遊て居られる。隣に居た子を見い。紡績の機械で手を挫ひたと」

美「だつて――」

和「お前は死だお母の事を忘れたろふ。元が糸様で育つたものだから、店をしまつて馬町へ引込だ時なんぞは、職は出來ず、借金の斷はりは云へず、質屋へも行かれず、何もかも己がして居たが、いつまでもさうはして居られないから、段々やりはやるものゝ何をしても意苦地は無つた。お前もよく似て、子供の時から門へ出ず、年中お雛様を飾りたがつたり、狹い内で獨り舞を舞ふたりするから、此奴はとても裏屋では住めない、また住ましたくないと、祇園町へやつたのも一つは出世を考へたんだ。」

美「いくら出世だつて、あんな内であんな人に添ふよりは裏店の方がようございます。これからは何でもします、仕事だつて、洗濯だつて、内職だつて、出來ない事はありませんから、だうぞ父様、側に置て下さい。」

和「お前は貧乏暮しを知らないから、そんな事をいふのだ。」

美「あなたはあの内の事を御存しないから。」

和「それに考へて見ろ、お前の体には金が懸つて居る、百圓。」

美「それは今までの辛抱で濟て居ますよ。」

和「それが唯引かされたのなら好いが、娘だ養女だ。」

美「だつて丸で義理も人情も無いんですもの。」

和「何が無くつても表向そうドやネへ、光世様。」

光「さうですネへ――法律の方はよく知りませんから――」

和「つまり金だ。百圓といふ大金、これから出さなくつちや物が云はれない。日に五錢や十錢のまうけで、千年たつても十圓と出來やしない。それがまた出さずに濟むにした所で、またどつかへやるか、側に居ちや――乞食になる――どうせ貧乏人の娘だ、あきらめてくれ。」

美津はワッと泣俯しぬ。光世が神女は地に落ちたり。

思ひきやこれもまた哀れなる人の娘、哀れなる身の上なりとは、派手なる表に裏見ゐず、氣高くさかしく清く美しと思ひしは誤、幾度か落ちんとして今や止まらず。免れ難き現の運命。哀れさに我を忘れて、そもよそに見られふかと、氣ばかりあせれど

何とすへき、
和助も目をこすりしが遲くなるといけない、まうお歸り――そしてまう、來ちやいけないせ。」
美「なぜてございます。」
和「知れてもいけす、お前も、辛抱が出來なくなるから。」
美「いゝゐします、おきらめました。其代り來さして下さい。」
和「いけない〳〵そんな事を云ふと、上方へでも行つてしまふ。」
美津はむせかへりぬ。
美「ヂヤ參りません、まう來ませんから、矢張こゝに居て下さい。」
和「フム――よそながらまた逢へるよ。」
美津は懷より帛紗包を取出し、「これは少しばかりですが。」
和「いけない〳〵そんなものを貰つちや。」
美「いゝゐ少しなの、十圓しかありません。小使に貰つたんですから、ようございます。」
和「いけないよ、お前とも緣は――切れて居るんだから。」

光世は聞くに堪へさりけり、殊に我へも憚からんと、お先へと立上れば、お前もと和助は促かす、美津は帛紗の端にて涙を拭ひ、
「ヂヤお父樣御機嫌よう。」
父は無言に戸をさしぬ。

第十六章　奴隷

肩掛も持ちたるまゝ美津はしほ〳〵俯むいて行くは家の方にあらす、光世は心付きて、「あなたどちらへいらつしやるんです。」
「內へかへります。」
「でも方角が違ひませふ。」
「エイ――」
元より知て引かへさす、光世はいよ〳〵心元無く、暫く共に並て行く。
「急度お歸りなさるんですか。」
「エイ……」

「どつか外へお寄りなさるの。」
「どこへも行く處はありません。」
「それにこつちの方へ。」
美津は答へず。暫くして、
「あなたいつか仰しやつたねへ、腕が入るならどんな事でもつて。」
光世はハツと胸に答へぬ。今なり〳〵力を盡すべきは今なるに此細腕よしや揮へはとて何になるべき。
さてはいつくなりとも逃すべきか。
それもいつくへ。其身さへ依り所無き職工、何を目當に、何を路用に。
さては剛平を諫め止めん。
しがの事さへ取上げぬ男、何として聞くべき。
才馬に計らんかれもあきらめしといふ、よしや妨くる策ありとも、己代らんとする事明なれは同し事なり。
公好を――公好を――されどかれ無くは第二の公好、第三、第四、人は代るも元來の

目的いかで變らん。光世は腕を組占めぬ。
美津も立止りて、
「女といふものはつまらないものですネへ。」
「なあに男でもです。こんな腕じや何にもなりやしません。」
茲は川の端なり。過く舟も無く、行く人も無し。夜は早深けて星も見わす、軒ランプの光ばかり。黑き中に音はせで、しかも動くは川の水なり。美津はつく〳〵見つめる体、光世は顏をのぞきて、
「あなた――短氣を出しちやいけません よ。」
「なせいけません。」
「なせつて――其つもりですか。」
「其つもりならだうなさいます。」
「無論止めます。」
「止めてだうなさるの。」
「だうにでもかうにでも止めます。斷然いけません。私はあなたを……賴りにし

て居るんですから……」
美津は顔を眺めぬ。光世は俯いて、
「ですから是非、活きて居て下さい。」
「唯活きて居る、丈で好いんですか。」
「よろしい、それで十分です、おきらめました。」
「どんな身分になつても。」
「エイ。」
「どんな思をしても。」
光世は水を睨みぬ。
「私から死にたくなりました。」
「何を仰つしやるんです、何であなたが死ぬなんて――」
二人は顔を見合しぬ。目と目には涙あり。
稍あつて美津が、
「私は死にません、死にませんから、あなた、一生――本當の兄弟の樣に――」

光世はしがに云ひしを思ひぬ。
「ア兄弟の樣に――思ひませふ。」
共に立つ間いくそばくぞ、彼も覺ゆす、此も覺ゆす。
漸くにして、美津は行く、此度は家の方へ、二足三足してまた戻り、
「あのこれ折角持て來たんですから、あなたから親父へやつては下さいませんか。」
先の帛紗を渡せば光世は受取り、
「よろしい、私か好い工合に上けませふ、大分困難の樣子ですから。」
「困つてますか。」
「明日の晩までにいくらかこしらへなくつちや、店立てを食ふ處です。」
「そんなにマア――」
「我々は皆そんなものです。」
美津はまた言葉なく、ずご〳〵歸り行く後姿、光世は見送りて尙も歸らず。紫の色さめて水の色冷かなる心地。我も恨めし、人も恨めし、人も悲し、我も悲し、思ひまはせは同し奴隷か。機械の奴隷なり、黃金の奴隷なり、止むへし、止むへし、斷然止むへし。

されと止めなは母を如何。

今は唯一の暖き光なり、變る事無き光なり、これば かり、これば かり、守るへきはこればかりなるに、抑々いかにして守るへき、いかにして養ふへき。

闘を越ひて飛上りぬ、母は臥して吐血して居り。

「だうなすつたの、」

母は僅にうなづくのみ。

「醫者を呼て來ませふ。」

「いやわざ〳〵來て貰つちやお禮が――」

「します、いくらでもします」とは云ひしがけふの賃錢、翌の費用を考ふれは藥價すら危うし。見まはせと賣るへきものは盡きて、忌々しき雜誌一束。さなり我和服を賣らん破服一つにて晝も夜も凌かは凌かれね事あらじと、走つて醫師を迎へしが首を傾け、長引くかと尋ぬれは、それならは幸なりといふ。胸轟ろきて終夜終日側に看護したけれと、扨はいよ〳〵錢に困れは、次の日も出てかけしが、隣の門を過きて美津子の金を思出しぬ。慌てゝ取りに戻りしが無し、其筈なり、和服の袂に入れ置きしを、其儘昨夜賣拂ひつ。汗かいて古着屋を叩き起し、返してくれと云へは夢でも見たか、懇意丈に夜遅く買つてやつたに、まう朝だ、いつまで寢ると逆の挨拶、証據無けれは爭はれす、齒噛て會社へ行きぬ。

第十七章　絶壁

金金金、返さねばならぬ美津子の金、償はねはならぬしがの金、拂はねはならぬ藥の金、憎き憎き憎き金、奴隷となつても得ねはならす、得るは唯此手、此手より外無し。光世其日の働すさましかりき。されと機械は同し樣に動て、報酬は同し事なり。美津の金はおろか、しがの金はたろか、藥を買ひ菓物を買へは夕飯も確ならす、此頃の騰貴。病無き者も皆しほれぬ。獨身の者も戯れ云はす、三日肴食はぬと骨が離れると傲りし者も三十日菜を食ひ、米丈は上米を食はぬとまづい菜が尙まづいと考へし者も南京米とかへ、春には瓦斯糸織買はふと樂しみし者も二子を賣る。遠く故里より來る者あれはいふ、家にては蕨を食ふ、通草を食ふ、茗荷の葉を食ふ、こゝに家あり、親あり子ある者は十一時間働て尙夜の仕事を求む。ましてしがは日々の座食、痛止れは

出てねばならず、これもだうしたものと光世に謀れど、此方も唯愁ふるばかり、
「仕様が無いネヘ、マア兎も角も私の家へお出でな。」
「そう願へりや結構ですが……御迷惑でせふ。」
「實はお母様が惡くつてネヘ。」
「オヤだうなすつたの。」
「余り長い間苦勞をさせたものだから、まう醫者はむつかしいといふのさ。」
「マア――」
「しかし一日でも取りとめやうと、藥や何かに物が入るので、來ても食ふものがないかも知れない。ハヽヽヽヽ」
寒く笑へばまことに泣き、
「私の親父は不意に死にましたから、心配も不意でしたが、さういふんドやさぞマア御心配で――ア手が自由だつたらお手傳ひするんですがネヘ。」
「手が自由なら來なくつても好いんだ。」
「ですが体はだうかこうか滿足ですから――こんな事をいふんですよ、向の銘酒屋のお神さんがね――お前さんは顔が……何だから、あの――」
「いけないよ、いけないよ、決して墜落しちやいけないよ、いくら困つてもいけない今が大事の處だ。どんな事をいふものがあつても、5つかり乘るとそれつきり、一且落ちたらまう地獄だ。」
「今でも地獄の樣ですもの。」
「そりやお前……氣の持ち樣だ、働て居る中はいくらつらくつてもマア〳〵一人前の人間だ。」
「それがまう働けないんですもの。」
「だから何か――外に――好い仕事を。」
「そんなものはありやしません。それにあの千吉が――」
「あの子にも困つたものだ、今からあれドや。」
ばた〳〵と馳せ來る千吉光世にも遠慮無く、立ちなから、
「姉さん錢をおくんな。」
「またそんな事をいふ、私が困つて居るのが分らないかい。」

「だつてまう何も落ちてないもの。」
「また――きのふの事にこりないの」
「きのふのて何。」
「あきれるねへ。」
光世は千吉の目をぢつと見れば、平氣にて彼方も見る。
「お前なぜあんな事をしたの、あんな人の物を盗むなんて。」
「なあに落ちてたんだもの。」
「落ちてたものでも唯取つちやいけない、まして落したのを知つて居ながら。」
「落すのが悪いや。」
「拾ふて取るのは尙悪るい。」
「なぜ。」
「なぜつて分らないかい
千吉はあたりを見るのみ。
「お前父樣を覺ゑて居るだろふ。あんな死樣をしなすつたが、それでも壓一つ人の

ものを取るといふ樣な事は無つた相だ、出來無つたに違ひない、だからあんな事になつたんだが、惡い事をして活きて居るよりは遙に好い。
「だつて死ぬのは痛いだらふ。」
「痛いか痛くないか、そいつは死で見ないから分らない。」
「厭だよ〳〵己は死ぬのは厭だ。」
「ヂヤ姉さんも働けなくなつて、誰も錢を呉るものが無くなつたらだらする。」
「そしたらまた何か探さあ。」
「何も落ちてなかつたらだらする。」
千吉は黑く笑む。光世は手を取て、
「お前父樣を思出す事があるだらう。」
「そらある。」
「何と思ふ。」
「何ととてだら。」
「今でも活きて居てほしいかい。」

「活きたつて仕様が無い、文久一つくれないもの。」
「姉さんを何と思つて居る。」
「姉さんは姉さんだ。」
「姉さんだドや分らない、頼りにして居るだらふ。」
「何の頼りに。」
「何のつてお前、今の所ドや天にも地にもたつた一人の兄弟ドやないか。」
「だから錢を貰ふんだ。」
「錢ドやない、情だよ、姉さんがあればこそ茲にも居りや、仕事もするんだらふ。」
「そりや無くなつて見なけりや分らないや。」
「ヂヤ姉さん死ても好いか。」
千吉は一寸姉の顔を見、また茫然。光世は首を傾けて、
「お前字を知るまい。」
「字、知つてら、五厘でも、一錢でも、五錢でも、十錢でも、間違やしない。」
「ヂヤ善といふ字を知つて居るか。」

「知つて居らあ、かうだろふ。」
手のひらに書くは錢の字なり。
「錢ドやない善だ。」
「そんなものは知らないや、それより早くおくんな。」
「仕様が無いな——お前懲役はこわくはないかい。」
「こゝとはどつちがましだらふ。」
光世はまた言葉無りき。千吉は走り出て、
「お鉢引きよせ制飯眺め、米は無いかと目に涙。」
「先の事を思ふと死にたくなります。」
半歌ひなから行きぬ。しがば顔を掩ふて、

第十八章　師走の月影

光世はまた社長を訪ひぬ。茲は今宵聟入なり。
玄關の襖を開て奥の奥まで燭臺列ね、疊盡く新にして、庭も余さず水打清め、臺所の方もさゝめきて、袴着けたる男四五人早控へて待ちかけたり。案内を乞へばとても

お逢はあるまいといふ。唯二三分にてよしといへば、澁々に入りぬ。待たさるゝ間も邪魔にせられてやう〳〵此方へと次の間へ通るも待たず剛平は立ちたるまゝ、

「何用だネ。」

「外の事ドやありません、あの賃銀の事で。」

「それはまう聞た〳〵」

「ですが非常に迫つて來たんです」

「始に云つた、親類だからと云つてお前丈余分にやれないつと。」

「いゝえ私丈ドやありません、皆にです、一般に困つて居ますから。」

「そんな事が一寸出來るものか。」

「でも非常に困つて居ます、それは名狀が出來ません。」

「此方も想像が出來ないネ。」

「ですが急に御調査をなすつて。」

「急につてさう行くものか、此方の方が急なのだから。」

「デヤ政事家に大改革をする樣に御盡力なすつて。」

「生意氣な事をいふ、職工の分在て。」

「職工で直接に出來ませんから願ふのです、是非だうか。」

「けふは聳入でネ。」

「ですから簡短に——」

答もせず、襖手荒く閉ちて入りぬ。

打倒してもやりたかりしが、母に思ひかへして門を出れば、鯛、海老尾より昆布、密柑男四人荷ふて入りぬ。

外は風猛り立てゝ師走の月銀を氷らし、辻の灯屢々消えんとする陰に破三味線叩て人無きに歌ふ盲兒あり。齷なき車重げに客載せず行く老車夫あり。淡路島通ひ馴れて尙千鳥聲泣く如き女房あり。淺妻舟も無く、何を枕の一時衣引く片手怪しきに、顏甚しくしがに似たり。驚けは彼は逃け行く。それかあらぬか、情無くなりて家に歸れは、母は待兼顏に息苦し。

第十九章　むくい

「だうです、けふは。」
「遲かつたねへ。」
つく〳〵見つめて目ばたきもせぬ顏の色此世の者に非ず。ぶる〳〵顫ひ出して物云はんとすれと能はず、藥はと見れは早盡きたり。取て來ませうと立たんとすれは止め、またしげ〳〵と見つめるばかり。二十年の勞働今や落ちかゝりて止めても止まらず、延すにも延されず、遲かりけり、今少し早く始めなは、我勞働にて代らんもの。されど我とても如何機械的の勞働、身は堪へず、心も堪へず、酬しかも薄し。酬多く勞少き業は得ず、得んとすれば心を欺く、欺かす耻ちさる働、母を活かさず、果は欺き耻かしめに終るかと悲しさ悔やしさつらさ腹立しさに、涙はほろ〳〵こぼるゝのみ。母も思に沈む樣なりしが、
「お前胸は痛みはしないか。」
「いゝえ……讀書を止めてから痛みません。」
「でも工場は塵だらけで、肺が惡くなるといふから。」
「なあにまだ……」

「まうお止しよ。」
「止めたら飯がくへません。」
「何か外に仕事は無いかい。」
「一日でもまう考へて居る隙はありません。」
母の目にも涙はふるひぬ。
「お前一人になつたら、もつと樂な仕事をおし。」
「そんな事を云つちやいけません——自分一人でも矢張これだけ働かなくつちやなりません。」
「それゞやとても体が續がないよ。」
「仕方がありません。」
涙は母の頰を流れぬ。「父樣も苦勞をなすつたが、それでも五十六までお出てなすつた。」
「私はとても——いや先は知れません よ。」
「知れないと云や知れないが、何だか私には分つて居る樣だよ。」

「どう分つて居ます。」
「どうつて……父様や私の事を考へると……お前でもまう……」母は顔を掩ひぬ。
光世はわざと勇ましげに、
「なあにまだ〳〵まだ私も活きますよ。これから先は地獄へ落るか極樂へ上るか
だうか氣を長くして見て居て下さい。」
「見るなと云つても、あの世から見て居ます。」
「いゝね此世です此世で見て居て下さい。」
「此世ではまう――一日と見られないよ。」
「そんな……そんな事がありますものか。」
「よくあの世で待て居るなんぞといふが、私は待たない。此世でもつとお前――人
間らしい樂しみをネへ。」
「樂しみてもう入りません。それよりは母様、あなた達者になつて下さいでないと
張合も目的もなくなります。」
「いゝね、私を當にしちやいけない、お前の爲だお前自身の。」

「私丈ならどうでもよろしい。母様があるからこんな仕事でも働けるんです。」
母はしやくり上げぬ。
「いけないよ〳〵そんな氣で居ちや、私が無くなつたら……お前は本當に氣が
弱い。」
「いゝね弱くないんです、弱くないんですが……」
光世も聲を上げたくなりぬ、齒を喰ひしばれば母は覗きて、
「損な子だネへ――父様がさう仰しやつた、昔なら暮しなんぞに頓着せず、武藝な
ら武藝、學問なら學問と、それば一心にやつて居られるのに此子は第一暮し
の爲に學問をしなくつちやならないから、とても上達は出來んと仰しやるから、
そんな事はありませんそれドや十分にやるまではだうありとしてやつて行き
まして、此子には暮し向の心配はさせませんと申上げたら、さう出來りや何より
の親の慈悲だ急度出來上つたらそれ丈のかへしはするだろふとおつしやる、い
ゝねかへしは入りません、唯それ丈喜てくれたらよろしいと云つたら、そりや喜
ふ所か、私が第一喜ふと、さも嬉しさうに、お前の手を取つて……笑つておなく

なりなすつた……」

母は目をふさぎて、「矢張私が惡かつた、まう少し辛抱して、十分にやり遂けるまで待てはよかつたにネヘ……勘忍しておくれ。」

光世はまた言葉も出てす。

「これトや父樣に申譯が無い。」

「いゝね申譯は私が致します、私が十分致します。それよりはあなたに……あなたに申譯が……」

「私に何が入るものか——私はだうでも好いよ。」

「いゝね好い事はありません。あなたに……あなたに對して……唯あなたに對して十分に申開きが出來ないのが殘念です……殘念でたまりません。」

「なあに云はなくつても分つて居るよ。」

「いゝね分りません、此胸の中は……云へません。」

「好いよ〳〵お前の胸の中は分つて居る。」

「だう分つて居ます。」

「だうつて……それは私にも云へない。」

「でも分つて居ますか。」

「アゝ。」

「いゝね、分りません、分りますまい、お分りになるはづがありません。こりや誰にも分らないんです。私一人……私が死でも……それつきりになるんです。」

「そんな事を云はずに、それまでにだうか——」

「いゝね仕樣がありません。唯あなた——あなたばかりです、あなたばかりに申上けたいのですから、是非活きて居て下さい。」

「活きて居られりや、誰が好むて死ぬものかネ、だうも壽命にや勝たれない。」

「いゝね壽命トやありません。過勞です、勞働が過きたからです。」

「さう云やお前の方が尙過きるよ。」

「私にや……當り前です。」

「いゝね當り前トやない、お前が職人なんて……それでしまつちや、それこそ壽命トやない。」

「壽命です、運命です。」
「違うよ〳〵、私は決して壽命とは思はない。」
「ヂヤ誰が惡いんでせふ。」
言葉も茲に極りぬ、親子は顔を見合すのみ。母は重き溜息つき、
「アヽまう云ふまい。それよりかお佛壇へお明しを上けておくれ。」
「ハイ。」
佛壇のみは今に殘しつ。光世は立て火をともせは、
「お前父樣のお顔は覺えてお出か。」
「エイ、かすかに……」
「十位で別れちやよく分るまい……だが私の顔は忘れないだろふネヘ。」
「忘れる所ドやありません、きざんであります。」
「お前の方はさうだろふが、此方は死でしまつちや……まうこれぎりかねヘ。」
母はまた改めて打眺め、
「めつきり色も惡くなつたネヘ。」

「それは風氣がありますから。」
「いゝえ常でも。」
「私よりあなた――長い間御苦勞をかけましたなあ。」
「なあに私は仕合せだよ。」
光世は涙血と湧きぬ、堪へ兼て立上れは、
「お待ちよ、そこに居ておくれ、側に居ておくれ、よつく顔を見せておくれ。」
云はるゝ程尚上けえす、俯むけは筒袖に、二つ三つ四つ雫はまろびぬ。
「あのお位牌を出しておくれ。」
「ハイ。」
先祖代々父に至るまでの位牌、取出して手に渡せは、
「私はこれで好い、墓なんぞはだうでも好いから、そんなお金に苦勞おしでない」
止めんとすれと言葉は出す。
「何か形見に上けたいが何にも無い。」
げに縫ふて貰ひし衣服さへ人の手に渡れは、形見は母の身につくものゝみ。

「其お召を戴きます。」
「これはいけない、血がついて居るから。」
「何がついてたつて……」
母の呼吸は苦しくなりぬ、すりよる光世をヂツと見る中、顔は漸く紫に、目は漸く空となりて、果ては閉ちてまた開かず。

第二十章　赤き光

がや〳〵と外の人音。火事かと光世は飛て出れば、隣の和助も出て見る。同し會社の職工なり。
光「だうしたんだ。」
一「今晩社長さんにお目出たがあるから、喜ひに行て賃錢を上げて貰ふんだ。」
光「だめだ〳〵私が先にさう云つたが蹴られた。」
二「さうか駄目か。」
三「何だ駄目だ。」

四「駄目だ〳〵。」
五「駄目ならよせ〳〵。」
六「よしたら死ぢまうぞ。」
光「死ね死ね叩きこわして死ね。」
光世は叫て駈出しぬ。職工も續て走れば、止めんと和助は追ふ、馬車轟かして前を過き行く飛鳥井西山多くの親戚、光世は速力二倍しぬ。門を入れば咎むる才馬突倒してどつと上れば、驚く夜業最中の職工、止むるあり、加はるあり、逃るあり、爭ふあり、呼ふ聲、泣く聲、わめく聲、機械は同し動く音、千吉や放ちけん、燃出る猛火の勢、綿に付き糸に付き、渦卷く烟、火の車、炎散て潮田の邸へ雨と吹こめば、押寄せて行く職工、公好は逃場に迷ひ、正憲は離亭に避く、剛平出てゝ叱咤すれば、愈々激して群かる鉄拳、群かる棍棒群かる機械、アレあぶないと遮る美津子、儀式其儘白小袖も荒男の目に入らでや、降りかゝる身を蔽ふて両手上けたる朝河光世、彼奴裏切だ、なぐれ〳〵〳〵

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夢醒む。あはれ光世は猶思ふ。

高安月郊作

毒龍　小說　近刊
重盛　既刊
遠藤武者　三連劇詩　近刊
文覺法師　〃
公曉　悲壯劇詩　〃
眞田幸村　〃
大盜中齋　〃
夜濤集　新体詩　〃

明治三十三年六月七日印刷
明治三十三年六月十四日發行

定價金四拾錢

著作兼發行者　京都市上京區東三本木南町八番戸　高安三郎

印刷者　大阪市東區釣鐘町百七十八番屋敷　兎頭捨吉

取次所　大阪市東區南本町四丁目卅六番屋敷　金尾文淵堂

印刷所　大阪市東區本町壹丁目三十六番屋敷　株式會社　大阪國文社

著作權所有